

留萌川水系河川整備基本方針

留萌川水系の流域及び河川の概要（案）

令和 年 月 日

国土交通省 水管理・国土保全局

目 次

1. 流域の自然状況	1
1-1 河川・流域の概要	1
1-2 地形	5
1-3 地質	6
1-4 気候・気象	7
2. 流域及び河川の自然環境.....	9
2-1 流域の自然環境	9
2-2 河川及びその周辺の自然環境.....	19
2-3 特徴的な河川景観や文化財等.....	25
2-4 河川環境を取り巻く背景.....	30
2-5 自然公園等の指定状況	31
3. 流域の社会状況	33
3-1 土地利用	33
3-2 人口	38
3-3 産業と経済	40
3-4 交通	42
3-5 関係ある法令の指定状況.....	43
4. 水害と治水事業の沿革.....	47
4-1 既往洪水の概要	47
4-2 治水事業の沿革	56
5. 水利用の現状	58
5-1 水利用の現状	58
5-2 渇水被害及び渇水調整	60
6. 河川流況及び水質の現状.....	61
6-1 河川流況の現状	61
6-2 河川水質の現状	63
7. 河川空間の利用状況	65
7-1 河川敷等の利用の状況	65
7-2 河川の利用状況	67
7-3 内水面漁業	70
8. 河道特性	71
8-1 河道の特性	71
8-2 河床変動の経年の変化	73
9. 河川管理	74
9-1 河川管理区間	74
9-2 河川管理施設	75
9-3 水防体制	76

9-4 危機管理への取り組み	77
10. 地域との連携	81
10-1 地域住民、河川協力団体、市民団体等との協働.....	81
10-2 関係自治体との連携・調整.....	81

1. 流域の自然状況

1-1 河川・流域の概要

留萌川は、その源を北海道留萌市の境にある天塩山地の南端に発し、タルマップ川、チバベリ川等の支川を合わせ北西に流れ、留萌市街部において日本海に注ぐ、幹川流路延長 44km、流域面積 270km² の一級河川である。

その流域は、北海道の北西部に位置し、関係市町村は、留萌市 1 市で、人口は約 2 万人であり、平成 26 年（2014 年）時点の流域内人口は約 17,300 人である。なお、流域内人口は留萌市の人口の約 86%を占め、人口密度は 64.0 人/km²である。

流域面積は留萌市の全面積の約 91%を占め、土地利用は、山林等が約 90%、水田・畑等の農地が約 5%、宅地等が約 5%となっている。

留萌川の名前は、アイヌ語で「潮が静かに入る川」を意味する「ルルモッペ」に由来し、松浦武四郎の西蝦夷日誌にも、「ルルは（汐）モは（静）ヲツは（ある、入る）ペは（水の事）なり。此川自然と奥深く、汐入る故になづく。」とある。

留萌川は、その流域すべてが留萌市の行政区域に含まれており、それゆえ留萌市の発展過程に密接に関わっている。

留萌川の歴史は、松前藩が江戸時代（慶長年間）にアイヌの人々との交易の場として知行地を置いたことに始まった。また、明治時代以降は、中上流部は政府直轄地である御料地として開拓され、下流部の河口周辺は北部日本海漁業の基地として発展してきた。この産業の発展を支えてきたのは留萌港であったが、当時の留萌川は蛇行が激しく水の流れが遅かったため、陸上交通の未整備であった内陸部への物資の輸送路として利用され、留萌の発展に大いに寄与してきた。

明治 29 年（1896 年）の藤山農場の開設、明治 31 年（1898 年）の御料地解放等により、移民の入植が進むにつれて道路らしきものが整備されたが、明治 43 年（1910 年）に鉄道が開通するまでは、留萌川は重要な交通手段として利用されていた。また、入植が進むにつれ、留萌川の水はかんがい用水としての利用へと、その役割は変化を遂げた。

その後、鉄道開通による物資輸送が盛んとなり、内陸の石炭等を港から輸送するため、留萌港の機能拡充を図る必要が生じた。そのため、留萌港修築工事の一環として、下流市街部を大蛇行して流れていた留萌川を大正 6 年（1917 年）から大正 12 年（1923 年）にかけて新水路を開削し、留萌港を通さずに直接日本海へ流すことにしたのである。また、この旧川が埋め立てられ、商用地や宅地として供給されたことで、留萌市発展の骨格が形成された。

さらに留萌川は河川を横断する構造物がなく、水際まで植生が繁茂する自然的景観を有する箇所も多いことから、サクラマス等の魚類が生息しやすい河川である。

また、留萌川は高水敷が狭隘で、利用可能な面積は非常に少ない状況にあるものの、下流市街地周辺を中心に、階段護岸や堤防上のサイクリングロード、小公園が整備されている箇所もあり、河川敷を利用したオープンスペース、散策やジョギング、まつりやイベントを行う場として有効に利用されている。

これらのことから、本水系の治水、利水、環境についての意義は極めて大きい。



上流部



中流部



下流部

※写真出典：北海道開発局（R3 年撮影）

写真 1-1 留萌川流域

1-2 地形

流域の地形は、東西に約 21km、南北に約 23km の三角形状を呈し、留萌川は、ほぼその中央を貫流している。

地形地域区分では、留萌川を挟んで増毛山地とポロシリ山地に分けられ、また海岸地域は阿分^{あふん}台地、三泊^{さんとり}台地に区分され、平坦地は少ない。留萌川の河口付近には、三角州性低地が分布し、これより上流には各河川沿いに細長く扇状地性低地が分布している。本川沿いは、上流から下流まで、この扇状地性低地が幅約 500m で続き、広い沖積平野の形成はない。また、海岸線に平行して上下 2 段の砂礫台地がみられ、これより内陸側は、大起伏丘陵地及び小起伏山地が広く分布している。

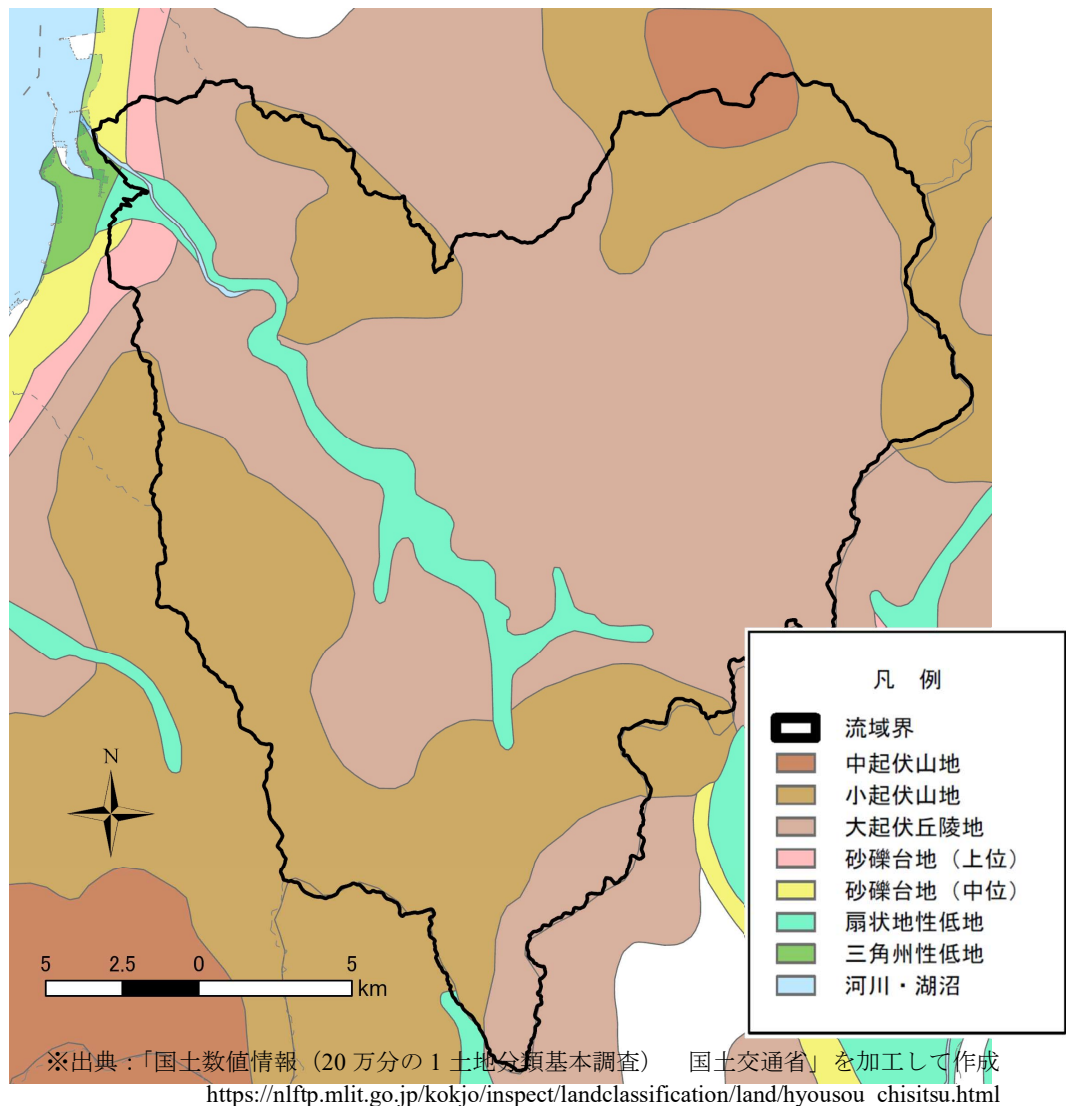


図 1-2 留萌川地形分類図

1-3 地質

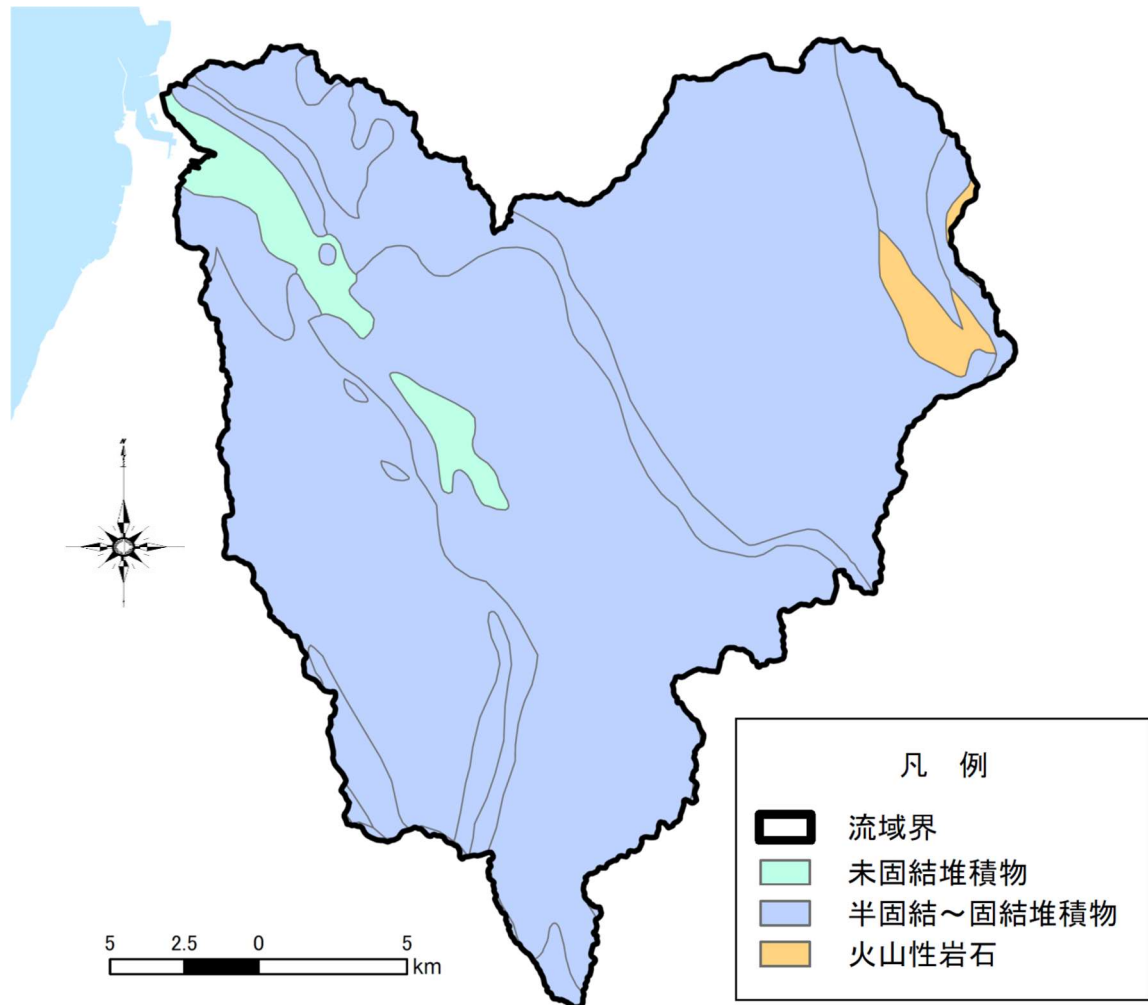
留萌川流域の地質は、主として山地を形成する新第三紀層と、河川や海岸低地に発達する第四紀の未固結堆積物で構成されている。

基盤の新第三紀層の地質構成は、中新世の砂岩、泥岩、礫岩、頁岩と、その上位の鮮新世の砂岩、凝灰岩及び一部に点在する玄武岩溶岩、火砕岩類と岩脈からなる。

留萌川左右岸の山地～丘陵地は、中新世の硬質な礫岩、頁岩が尾根筋を形成し、軟質な砂岩、泥岩が緩やかな丘陵地帯を形成している。この丘陵地帯に支流が流れ、留萌川本流は鮮新世の軟質な砂岩、凝灰岩分布域を流下する。

これらの地層は大局的には北西－南東方向を軸とする褶曲構造をなしており、留萌川の中流～下流域の流向を支配している。

基盤の新第三紀層を覆う新第四紀層は、主として現河川によってもたらされた氾濫原堆積物であり、未固結の砂～粘土からなる。河口から約 8km 上流の大和田地域に、固い基盤岩の露出による地形の狭隘部があり、氾濫原堆積物は、ここを境に上流側は幅約 500m、下流側は幅約 1,000m で分布する。



※出典：「国土数値情報（20 万分の 1 土地分類基本調査） 国土交通省」を加工して作成
https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/hyousou_chisitsu.html

図 1-3 留萌川表層地質図

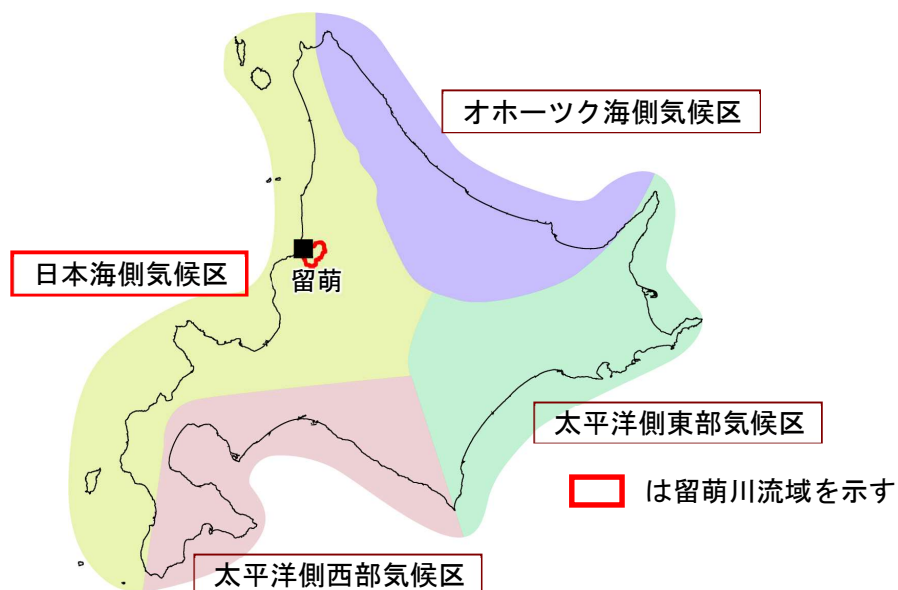
1-4 気候・気象

留萌川流域の気候は、冬期においてはアジア大陸からの寒冷な気団が北西季節風として運ばれ、夏期には北太平洋の温暖な気団が南東季節風として流入し暑さをもたらすが、盛夏期は短期間である。

本流域の年平均気温は8℃程度であり、最暖期の7月～8月の月平均気温は20℃程度、最寒期の1月～2月は－5℃程度である。

また、流域の年平均降水量は1,500mm程度であり、出水は8月～10月頃の台風によるものの及び前線によるものが多い。

年平均風速は5m/s程度で、夏は比較的弱い、初冬から強くなり、11月～1月にかけて6～7m/sと年間を通して最大となる。



※出典：「北海道の気候」を基に作成

図 1-4 気候区分図

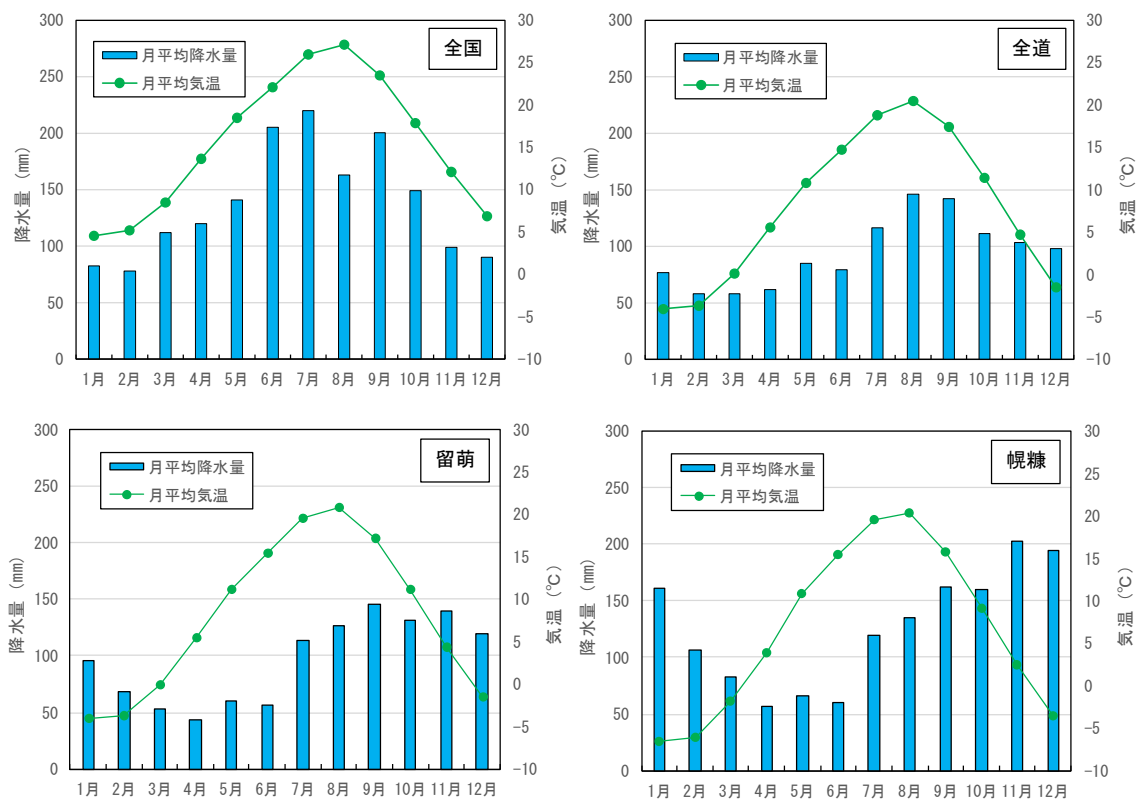
表 1-2 月別気温・降水量

	留萌				幌糠			
	降水量 (mm)	平均気温 (℃)	日最高 気温 (℃)	日最低 気温 (℃)	降水量 (mm)	平均気温 (℃)	日最高 気温 (℃)	日最低 気温 (℃)
1月	95.8	-4.1	-1.0	-7.4	161.5	-6.5	-2.2	-12.0
2月	68.5	-3.7	-0.4	-7.4	106.9	-6.1	-1.2	-12.5
3月	53.5	0.0	3.2	-3.5	82.4	-1.8	2.8	-7.6
4月	43.2	5.5	9.4	1.6	57.2	3.9	9.4	-1.6
5月	59.7	11.1	15.4	7.2	66.7	10.9	17.2	4.7
6月	56.3	15.4	19.2	12.3	59.8	15.5	21.3	10.6
7月	113.9	19.6	23.1	16.7	119.4	19.6	24.9	15.2
8月	126.6	20.9	24.6	17.7	135.4	20.3	25.7	15.8
9月	145.4	17.2	21.4	13.1	162.4	15.7	21.8	10.3
10月	131.4	11.1	15.2	6.9	160.4	9.1	15.0	3.7
11月	140.0	4.4	7.8	1.1	202.8	2.5	6.6	-1.4
12月	119.9	-1.5	1.3	-4.4	194.4	-3.6	-0.2	-7.6

※気象庁の過去の気象データをもとに作成。1991年～2020年を平均したもの。

表 1-3 各気象観測値

項目	留萌	幌糠	全道平均	全国平均
平均気温 (°C)	8.0	6.6	7.9	15.5
最高気温 (°C)	11.6	11.8	12.6	21.0
最低気温 (°C)	4.5	1.5	3.2	10.7
平均風速 (m/s)	5.1	1.8	4.0	2.9
最大風速 (m/s)	20.6	13.2	25.0	24.3
日照時間 (時間)	1,514.0	1,436.5	1,698.8	1,913.4
降水量 (mm)	1,154.1	1,509.0	1,136.1	1,676.4



※気象庁の過去の気象データをもとに作成。

※全国平均の値は、1991年～2020年の各都道府県（県庁所在地）のデータを平均したもの。

埼玉県は熊谷、滋賀県は彦根のデータによる。

※全道平均の値は、1991年～2020年の各支庁所在地のデータを平均したもの。

※留萌、幌糠の値は、1991年～2020年を平均したもの。

図 1-5 月別降水量

2. 流域及び河川の自然環境

2-1 流域の自然環境

(1) 植生

留萌川流域の植生状況としては、山地部における自然植生のほとんどが、ブナクラス域自然植生、ブナクラス域代償植生及び植林地、耕作地植生である。河道内では、下流部ではヨシ原などの草本群落が見られ、中上流部では、シバ等からなる人工草地、オオヨモギーオオイタドリ群落等の草本群落及びエゾキヌヤナギーオノエヤナギ群集などヤナギ高木林が主にみられる。また、絶滅が危惧される植物のうち、危惧ⅠA類にランクされるホソバドジョウツナギ、危惧Ⅱ類にランクされるホソバヒルムシロ、サルメンエビネ、ヤマタニタデ、ホソバノツルリンドウ、準絶滅危惧のイトモ、ミクリ、タマミクリ、ヤマシャクヤク、イヌタヌキモ、コモチミミコウモリが確認されている。



ヨシ原

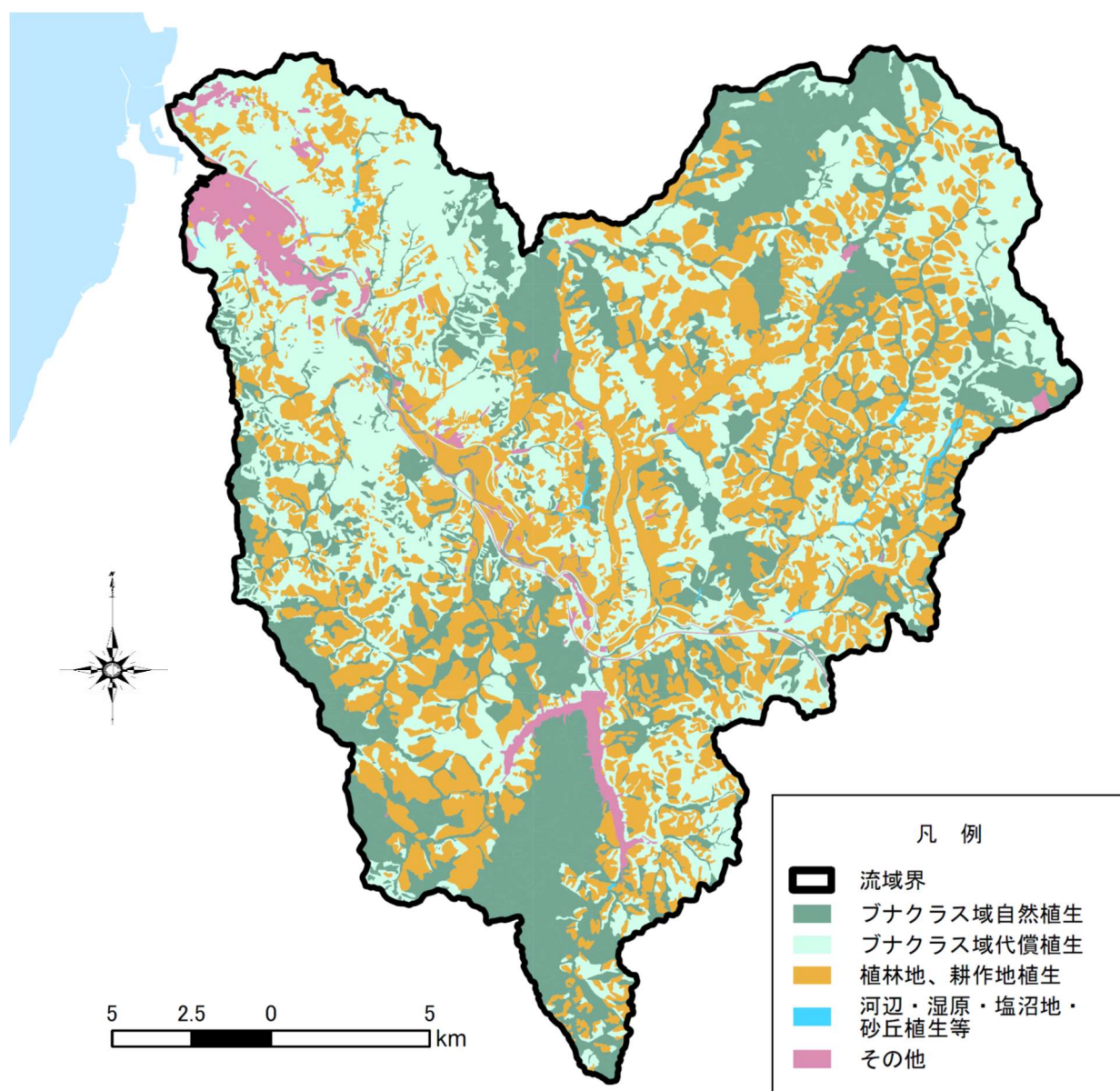


オオヨモギーオオイタドリ群落



エゾキヌヤナギーオノエヤナギ群集

写真 2-1 植生



※出典：生物多様性情報システム
(環境省生物多様性センター)

図 2-1 留萌川植生図

(2) 哺乳類

留萌ダム周辺では、森林が多く、ヒグマ、エゾシカ、キタキツネ等の大型哺乳類が生息する。中上流域では、アライグマ、エゾタヌキ、エゾクロテン、コテングコウモリが生息するほか、アカネズミやヒメネズミ等のネズミ類も確認されている。また、下流域ではキタリス、エゾヤチネズミ、アライグマが確認されている。エゾシカ、キタキツネ、エゾタヌキ、キタリス、エゾクロテンは留萌川流域で広く生息している。

重要種としては、コウモリ類ではクロオオアブラコウモリ、ヤマコウモリ、コテングコウモリ、ネズミ類はムクゲネズミとカラフトアカネズミ、その他ではヒグマとエゾクロテンが確認されている。



コテングコウモリ



カラフトアカネズミ

写真 2-2 哺乳類

(3) 鳥類

留萌ダム周辺では、周辺に山地が迫っていることから、フクロウ、アオバト、オオルリといった森林性の鳥類がみられる。また、中上流域では山地に囲まれた低平地を蛇行しながら流下しているため、ホオアカ、ヒバリ、アオジ等の草地に生息する鳥類やオオアカゲラ、オジロワシ、クマゲラ等の森林性で河畔林を休憩場等に利用する鳥類がみられるようになる。

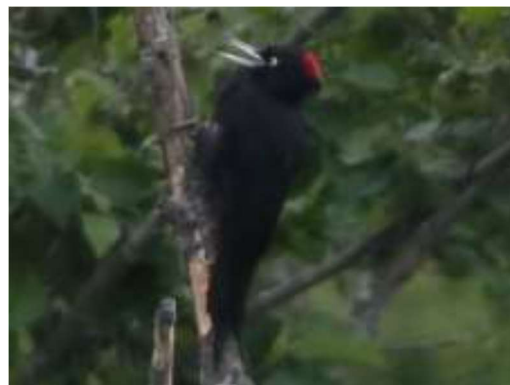
下流域は市街地にヨシ原が限定的に分布しているため、ハクセキレイやカワラヒワ、ヨシ原を利用するオオヨシキリ等がみられる。

河口部には、広い水域や干潟等の環境があるため、ウミネコ等のカモメ類や、ヒメウ、ウミウ等のウ類が多くみられ、ウミネコ、ウ類の集団中継地となっている。

重要種としては、天然記念物であるオジロワシ、クマゲラ等が確認されている。



オジロワシ



クマゲラ

写真 2-3 鳥類

(4) 昆虫類

昆虫類としては、フタスジカスミカメ等の草原性の種が多くみられる。山地が迫る場所では林床を生息場所とするオサムシ類も多く、農地や市街地が隣接する場所では、アキアカネやテンスジツトガ等の草原性の種が主体である。

重要種としては、草原性の河川敷を主な生息場所とするウラギンスジヒョウモンや林床を主な生息場所とするセダカオサムシ等の種が確認されている。



ウラギンスジヒョウモン

写真 2-4 昆虫類

(5) 両生類・爬虫類

両生類・爬虫類としては、エゾサンショウウオ、エゾアカガエル等が生息している。中～下流の後背水域や樋門排水合流部等、流れの緩い箇所ではエゾアカガエルの卵塊が確認されており、これらは本種の主要な生息地であることが考えられる。

(6) 魚類

留萌ダム周辺はダム湖となっていることから、ギンブナやウキゴリが多く生息するほか、フクドジョウやウグイが確認されている。

中上流域は、河畔林や水際植生が分布し、流れの緩い環境を好むエゾウグイが多く生息する。また、瀬と淵も分布し、冷涼な瀬淵環境を好むサクラマス（ヤマメ）がみられる。

下流部の感潮域では、シラウオやミミズハゼがみられる。

また、サケ・サクラマス等の回遊魚が遡上し、留萌川支流が主な産卵場となっている。重要種としては、カワヤツメ、エゾホトケドジョウ等が確認されている。



ギンブナ



ウキゴリ



エゾウグイ



サクラマス（ヤマメ）

写真 2-5(1) 魚類



シラウオ



ミミズハゼ



カワヤツメ



エゾホトケドジョウ

写真 2-5 (2) 魚類

(7) 底生動物

留萌ダム周辺では、コガタシマトビケラ等、流れがやや穏やかな環境でみられる種が多く確認されている。中上流部では、平瀬や早瀬においてアカマダラカゲロウ、サホコカゲロウ等が多く確認されている。水際植生や沈水したヤナギ低木林等流れの緩い箇所ではシマイシビル等が確認されている。下流域は感潮域であるため、ユビナガスジエビ等の河口や干潟の生物が多く確認されている。

重要種としては、カワシンジュガイ等が確認されている。



カワシンジュガイ

写真 2-6 底生動物

表 2-1(1) 留萌川水系の重要種

区分	No.	種名	文化財 保護法	種の 保存法	環境省 レッドリスト 2020	北海道 レッドリスト	北海道 レッドデータブック 2001
植物	1	オクエゾサイシン					R
	2	ホソバヒルムシロ			VU		
	3	イトモ			NT		
	4	カタクリ					N
	5	サルメンエビネ			VU		En
	6	ミクリ			NT		R
	7	タマミクリ			NT		
	8	ホソバドジョウツナギ			CR		
	9	シラネアオイ					Vu
	10	ヤマシャクヤク			NT		R
	11	ヤマタニタデ			VU		
	12	エゾオオサクラソウ					R
	13	ホソバノツルリンドウ			VU		
	14	イヌタヌキモ			NT		
	15	コモチミミコウモリ			NT		
両生類	16	エゾサンショウウオ			DD	N	
爬虫類	17	該当なし					
哺乳類	18	クロオオアブラコウモリ			DD	Nt	
	19	ヤマコウモリ			VU	Nt	
	20	コテングコウモリ				N	
	21	ムクゲネズミ			NT	Nt	
	22	ハントウアカネズミ (カラフトアカネズミ)				N	
	23	ヒグマ			LP	Lp	
	24	クロテン (エゾクロテン)			NT	Nt	
	25	エゾライチョウ			DD	Nt	
鳥類	26	ヒシクイ	-	-	-	-	
	27	オオヒシクイ	天		NT	N	
	28	ヒシクイ (亜種)	天		VU	N	
	29	オオヒシクイ	天		NT	N	
	30	ヒシクイ (亜種)	天		VU	N	
	31	マガン	天		NT	N	
	32	オシドリ			DD	Nt	
	33	シノリガモ			LP		
	34	ヒメウ			EN	En	
	35	ヨタカ			NT	Nt	
	36	ヤマシギ				N	
	37	オオジシギ			NT	Nt	
	38	ウミネコ				Nt	
	39	オオセグロカモメ			NT	Nt	
	40	ミサゴ			NT	Nt	
	41	ハチクマ			NT	Nt	
	42	オジロワシ	天	内	VU	Vu	
	43	オオワシ	天	内	VU	Vu	
	44	ツミ				Dd	
	45	ハイタカ			NT	Nt	
	46	オオタカ			NT	Nt	
	47	クマタカ		内	EN	En	
	48	アオバズク				Dd	
	49	ヤマセミ				N	
	50	オオアカゲラ				Dd	

表 2-1 (2) 留萌川水系の重要種

区分	No.	種名	文化財 保護法	種の 保存法	環境省 レッドリスト 2020	北海道 レッドリスト	北海道 レッドデータブック 2001
鳥類	51	クマゲラ	天		VU	Vu	
	52	ハヤブサ		内	VU	Vu	
	53	ギンザンマシコ				Nt	
	54	ホオアカ				Nt	
魚類	55	スナヤツメ 北方種			VU		
	56	カワヤツメ			VU		Nt
	57	カワヤツメ 属	-	-	-		-
	58	スナヤツメ 北方種			VU		
	59	カワヤツメ			VU		Nt
	60	ヤチウグイ			NT		Nt
	61	ジュウサンウグイ					N
	62	エゾウグイ					N
	63	ドジョウ			NT		
	64	ドジョウ 類	-	-	-		-
	65	ドジョウ			NT		
	66	キタドジョウ			DD		
	67	エゾホトケドジョウ			EN		En
	68	シラウオ					Vu
	69	サクラマス			NT		N
	70	サクラマス (ヤマメ)			NT		N
	71	ニホンイトヨ					N
	72	ハナカジカ					N
	73	ミミズハゼ					Nt
陸上昆虫類	74	マダラヤンマ			NT		R
	75	コシボソヤンマ					R
	76	オオイナズマヨコバイ					R
	77	ゴマフトビケラ					R
	78	ハイイロボクトウ			NT		
	79	ウスイロオナガシジミ			CR		
	80	カバイロシジミ			NT		
	81	ゴマシジミ 北海道・東北亜種			NT	N	
	82	ウラギンスジヒョウモン			VU		
	83	ヒョウモンチョウ 東北以北亜種			NT	Dd	
	84	ヒメギフチョウ 北海道亜種			NT		
	85	キスジウスキョトウ			VU		
	86	モイワキノコバエモドキ			DD		
	87	ネグロクサアブ			DD		
	88	フタオビアリノスアブ					R
	89	エゾクロバエ					R
	90	キバネクロバエ					R
	91	カスミニクバエ					R
	92	キタシリアカニクバエ					R
	93	セダカオサムシ			VU		
	94	エゾゲンゴロウモドキ			VU	N	
	95	キボシツブゲンゴロウ			NT	Nt	
	96	キベリマメゲンゴロウ			NT		
	97	オオミズスマシ			NT		
	98	エゾコオナガミズスマシ			NT	Nt	
	99	ガムシ			NT		
	100	エゾカミキリ				Nt	

表 2-1 (3) 留萌川水系の重要種

区分	No.	種名	文化財 保護法	種の 保存法	環境省 レッドリスト 2020	北海道 レッドリスト	北海道 レッドデータブック 2001
陸上昆虫類	101	シリジロヒゲナガゾウムシ				Nt	
	102	オオマダラヒゲナガゾウムシ				Nt	
	103	エゾアカヤマアリ			VU		
	104	キオビホオナガスズメバチ			DD		
	105	モンズズメバチ			DD		
	106	チャイロスズメバチ					R
底生動物	107	コシダカヒメモノアラガイ			DD		
	108	モノアラガイ			NT		
	109	ハブタエヒラマキガイ			DD		
	110	カワシンジュガイ		内 (特定第二種)	EN		
	111	ムカシトンボ					N
	112	コシボソヤンマ					R
	113	Semblis属	-	-	-	-	-
	114	ゴマフトビケラ					R
	115	カラフトゴマフトビケラ					R
	116	キベリマメゲンゴロウ			NT		
	117	キボシツブゲンゴロウ			NT	Nt	R
	118	オオミズスマシ			NT		
	119	クビボソコガシラミズムシ			DD		
	120	ガムシ			NT		
	121	ミズバチ			DD		

< 凡例 >

- ・文化財保護法
「文化財保護法」(昭和 25 年法律第 214 号)
特:特別天然記念物、天:天然記念物
- ・種の保存法
「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律施行令の一部を改正する政令」
(令和 4 年政令第 12 号)
内:国内希少野生動植物種、特国:特定国内希少野生動植物種、緊:緊急指定種
- ・環境省レッドリスト 2020
環境省 (2020)「環境省レッドリスト 2020」
EX:絶滅、EW:野生絶滅、CR:絶滅危惧 IA 類、EN:絶滅危惧 IB 類、VU:絶滅危惧 II 類
NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群
- ・北海道レッドリスト
北海道 (2015)「北海道レッドリスト【両生類・爬虫類編】改訂版 (2015 年)」
北海道 (2016)「北海道レッドリスト【哺乳類編】改訂版 (2016 年)」
北海道 (2016)「北海道レッドリスト【昆虫>チョウ目編】改訂版 (2016)」
北海道 (2017)「北海道レッドリスト【鳥編】改訂版 (2017 年)」
北海道 (2018)「北海道レッドリスト【魚類編 (汽水・淡水)】改訂版 (2018 年)」
北海道 (2019)「北海道レッドリスト【昆虫>コウチュウ目編】改訂版 (2019)」
Ex:絶滅、Ew:野生絶滅、Cr:絶滅危惧 IA 類、En:絶滅危惧 IB 類、Vu:絶滅危惧 II 類、
Nt:準絶滅危惧、Dd:情報不足、N:留意、Lp:絶滅のおそれのある地域個体群
- ・北海道レッドデータブック 2001
北海道 (2001)「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック 2001」
Ex:絶滅種、Cr:絶滅危機種、En:絶滅危惧種、Vu:絶滅危急種、R:希少種、N:留意種、
Lp:地域個体群

*種まで特定されていない確認種について、候補となる種が全て重要種に該当する場合、それぞれの指定状況を併記した。

2-2 河川及びその周辺の自然環境

(1) 留萌ダム周辺

留萌川の支流であるチバベリ川に位置する留萌ダムは、丘陵性山地がダム湖の際まで迫っている景観が形成されている。植生は、山地林及び溪畔林を主体とする樹林地で、トドマツ等の針葉樹林、ミズナラ、ハルニレ、ヤチダモ等の落葉広葉樹が分布する。また、かつて林業が盛んだったためカラマツやアカトドマツ植林地が多くみられる。哺乳類はヒグマ、エゾシカ、キタキツネ等が生息し、魚類はギンブナやウキゴリが多く生息するほか、フクドジョウやウグイが確認されている。



写真 2-7 留萌ダム

(2) 上流部^{とうげした}（峠下～幌糠付近）

峠下から幌糠付近までの上流部は、河床勾配が約 1/500 であり、森林に囲まれた山間の農地の間を流下し、所々で著しく蛇行している。植生は、山付きの河畔林は山地から連続するヤチダモやハルニレ、ミズナラ等の広葉樹が分布し、農地と隣接する河畔林にはヤナギ林が分布している。哺乳類は、アライグマ、エゾタヌキ、エゾクロテン、コテングコウモリが生息するほか、アカネズミやヒメネズミ等のネズミ類が生息している。鳥類は、クマガラ等の森林性で河畔林を休憩場等に利用する鳥類やホオアカ、ヒバリ、アオジ等の草地性の種がみられる。魚類は、冷涼な瀬淵環境を好むサクラマス（ヤマメ）が生息する。



写真 2-8 留萌川上流部

(3) 中流部^{たかさご}（幌糠～高砂付近）

幌糠から高砂付近までの中流部は、河床勾配が約 1/600～1/1,500 であり、森林に囲まれた山間の農地の間を流下し、所々で著しく蛇行し、市街地へ流下していく。植生は、山付きの河畔林は山地から連続するヤチダモやハルニレ、ミズナラ等の広葉樹が分布し、農地や市街地と隣接する河畔林にはヤナギ林が分布している。哺乳類は、アライグマ、エゾタヌキ、エゾクロテン、コテングコウモリが生息するほか、アカネズミやヒメネズミ等のネズミ類が生息している。鳥類は、オオアカゲラやオジロワシ等の森林性で河畔林を休憩場等に利



写真 2-9 留萌川中流部

用する鳥類やホオアカ、ヒバリ、アオジ等の草地性の種がみられる。また、魚類はエゾウグイ等、流れの緩い場所を好む種が多く生息する。

(4) 下流部(高砂付近～河口)

高砂付近から河口までの下流部は、河床勾配が約1/5,000～1/2,500であり、市街地を流下している。植生は、オオイタドリ、ヨシ等がみられ、河口付近ではハマニシク等の海浜植生がみられる。哺乳類は、キタリス、エゾヤチネズミ、アライグマが確認されている。鳥類は、ヨシ原が限定的に分布しているため、ハクセキレイやカワラヒワ、ヨシ原を利用するオオヨシキリ等がみられる。魚類は感潮域であるため、シラウオ、ミミズハゼ等の海水魚がみられる。



写真 2-10 留萌川下流部

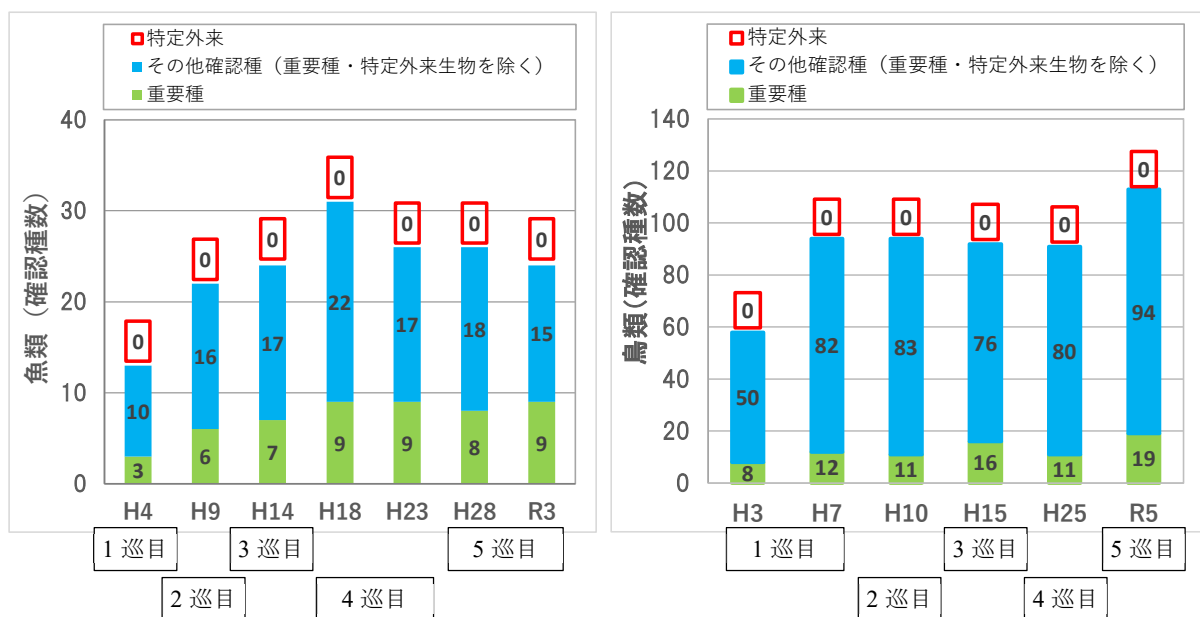
(5) 動植物の生息・生育・繁殖環境等の変遷

① 動植物の確認種数の変遷

魚類は、調査地点・調査頻度の追加や、捕獲方法の変更により、平成4年度（1992年度）から平成18年度（2006年度）まで確認数が増加したが、平成18年度（2006年度）以降の調査において、確認数に大きな変化はみられない。

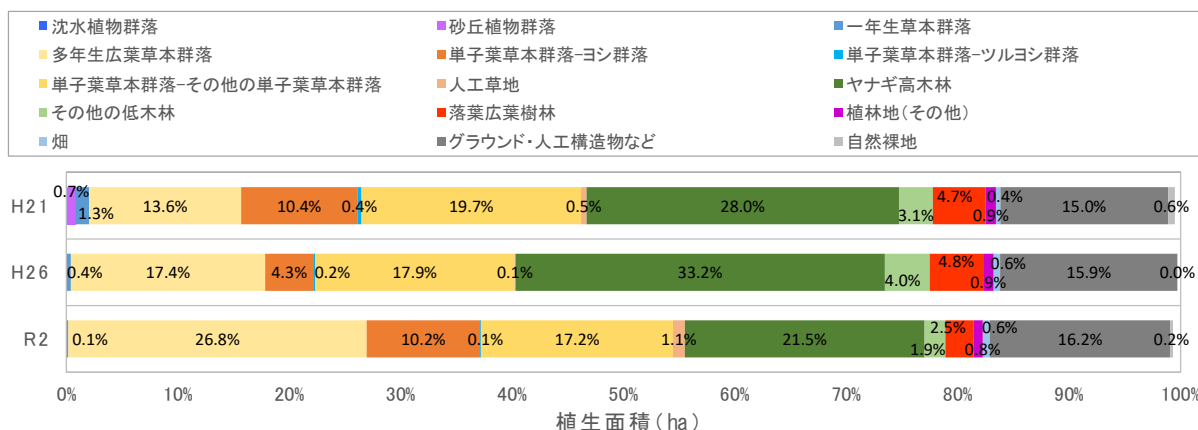
鳥類は、調査回数の増加により平成3年度（1991年度）から平成7年度（1995年度）まで確認数が増加したが、平成7年度（1995年度）以降の調査において、確認数に大きな変化はみられない。

河道内は、近年は樹林環境の減少傾向と草地環境の増加傾向がみられる。その他の植物群落については構成割合に大きな変化はみられない。



※出典：河川水辺の国勢調査

図 2-2 生物相の経年変化（左：魚類、右：鳥類）



※出典：河川水辺の国勢調査

図 2-3 河道内の植物群落とその内訳の変遷

② 留萌川の気温、水温の変化

留萌川の年平均気温は、留萌観測所において 47 年間で約 2.5℃、幌糠観測所において 45 年間で約 2.0℃、それぞれ上昇している。

年平均水温は年による変動がみられるものの、いずれの観測所においても 52 年間で大きな変化はみられない。

留萌橋地点の水温の経月変化をみると、概ね最低となる 1 月は 0～2℃で平均 0.4℃、最高となる 8 月は 18～29℃で平均 23.5℃となる。

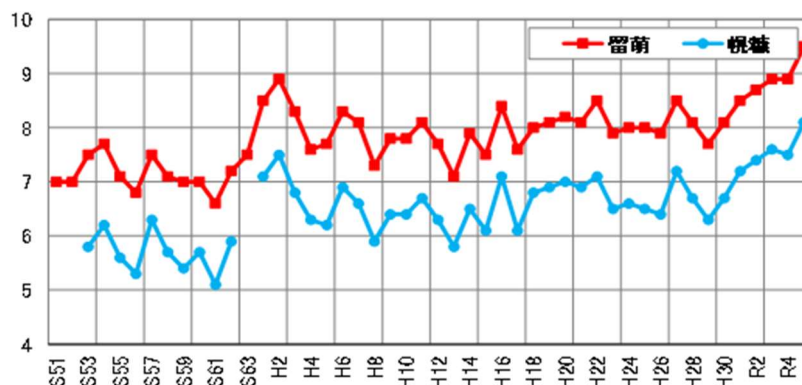


図 2-4 気温（年間平均値）の経年変化(昭和 51 年(1976 年)～令和 5 年(2023 年))

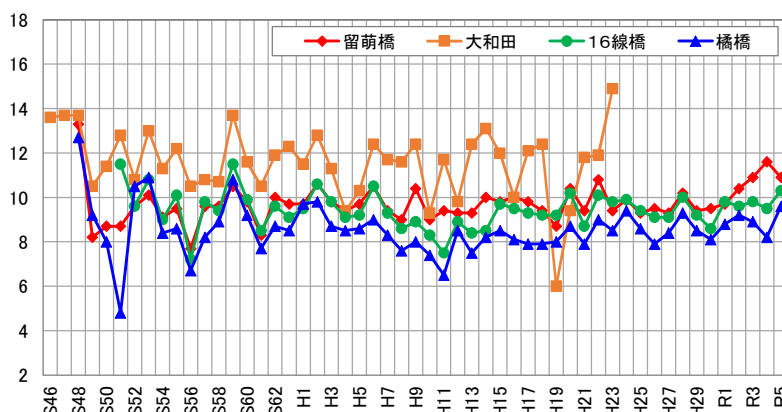


図 2-5 水温（年間平均値）の経年変化

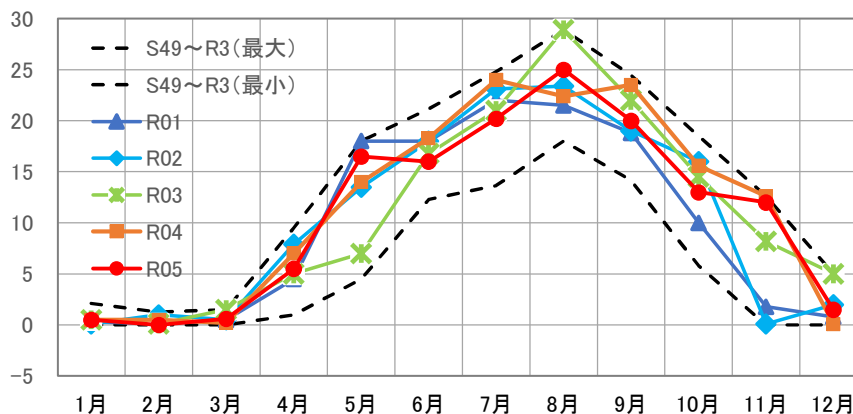


図 2-6 水温（留萌橋地点）の経月変化

(6) 自然環境の現状

① 主要な自然環境要素の変化

留萌川における低・中茎草地の面積は、令和2年度（2020年度）時点で増加傾向がみられる。一方で、河辺性の樹林・河畔林の距離は、令和2年度（2020年度）時点で減少傾向にある。

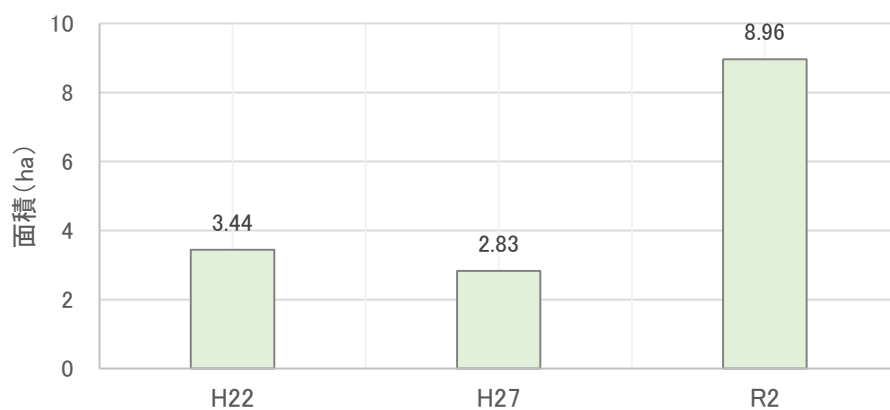


図 2-7 低・中茎草地の変遷



図 2-8 河辺性の樹林・河畔林距離の変遷

② 外来種の確認状況

留萌川では、魚類や底生動物で特定外来種は確認されていない。一方で、植物のオオハンゴンソウ、哺乳類のアライグマが確認されている。



アライグマ



オオハンゴンソウ

写真 2-11 外来生物

2-3 特徴的な河川景観や文化財等

(1) 特徴的な河川景観

留萌川流域には、恵まれた自然と、豊かな歴史・風土に培われてきた多数の名勝地や景勝地等がある。

また、南は小樽^{おたる}から北は稚内^{わっかない}まで、国道 231 号・232 号と道道 106 号稚内天塩線で結ばれる 327km の沿海ルートと、天売^{てうり}・焼尻^{やぎしり}・利尻^{りしり}・礼文^{れぶん}の 4 離島航路は「オロロンライン」と呼ばれ、18 市町村をかかえた大きな観光ルートとなっている。

留萌市はオロロンラインの中継点に位置する暑寒別連峰^{しょかんべつ}やオロロン鳥が有名な暑寒別天売焼尻国定公園^{しょかんべつ}に挟まれた町である。河口付近の丘に建つ留萌灯台からは、港町の留萌市街地に留萌川が流入する風景と暑寒別連峰を一望できる。



留萌灯台



灯台からの港町風景と暑寒別連峰

※写真出典：かわたびほっかいどうホームページ

写真 2-12 特徴的な河川景観

表 2-2(1) 主な観光対象

項目	名称	概要
公園	黄金岬海浜公園	黄金岬は、柱を積み重ねたような荒々しい奇岩が幾つも並ぶ、独特な景観を持つ海岸。日本海に沈むその夕陽は絶景であり、「日本の夕陽百選」にも選ばれている。 小さな磯ガニが生息しており、夏には海の家で販売しているイカの足で磯ガニ釣りも楽しめる。 冬には珍しい「けあらし」を見ることが出来る。
公園	千望台	海拔 180m に位置する丘陵地帯で、留萌港を中心に広がる市街地を一望できる景勝地。 北の水平線には、国定公園の秀峰が望める。 夕景や夜景を望むには絶好のスポット。 駐車場にはカフェが隣接しており、食事を楽しむこともできる。
観光拠点	海のふるさと館	幕末に「のろし台」として利用された高台に建つ資料館。 留萌の歴史を道具や映像・レプリカ等によって再現している留萌市を代表する施設で、NPO 法人留萌観光協会の事務所を併設している。 また、ラウンジを使ったイベントの開催や黄金岬と日本一の夕陽を見ることができ、「るもい浜焼き」などにも利用されている。
公園	礼受牧場（礼受牧場畜産館トリム）	大型風車が立ち並び、日本海や暑寒岳を望む風光明媚な観光スポットとして毎年大勢の市民や観光客でにぎわう。 7月中旬から8月中旬には白いそばの花で彩られる。
自然	ゴールデンビーチるもい	全長 1km 以上ある道北最大の海水浴場。 シャワー室（有料）やトイレ、洗い場も整備され、多くのキャンパーが訪れる。 また、レンタルスペースとして緑地帯エリア（有料）が貸し出されており、バーベキュー用の炭や食材の販売もしているため、気軽に海水浴を楽しむことができる。
観光拠点	おみやげ処 お勝手屋 萌	NPO 法人留萌観光協会が運営するアンテナショップ。 留萌管内の特産品を中心に、地元のお土産を多数取り揃えている。 店内には観光案内所も併設され、旅の拠点としても活用できる。
観光拠点	道の駅るもい	高規格幹線道路「深川・留萌自動車道」のインターチェンジに近接しているアクセスの良さを活かし、留萌地域のゲートウェイとして地域の情報を発信している。 エリア内には、広大な芝生広場やドッグラン、パークゴルフ場をはじめ、テイクアウト品が楽しめるチャレンジショップも営業している。
観光拠点	屋内交流・遊戯施設「ちゃいるも」	令和 4 年 4 月にオープンした、くつろぎの「空間」と地域特産品等の「魅力」を発信する新たな交流拠点。施設内には普段遊ぶことが出来ない複合遊具やエアトラックを楽しめる『遊戯広場』、ナニコレ自販機や種類豊富な「ドーナツだんご」などを楽しめる『ルモンド道の駅店 ルモカフェ』、留萌地域の特産品や限定グッズを販売しているアンテナショップ『留萌おみやげ処 お勝手屋 萌 道の駅店』が営業している。
公園	神居岩公園	留萌市最大の公園。 パークゴルフ場・キャンプ場があり、桜の森が広がっている。
自然	留萌ダム	夏はカヌー体験、冬はスノーシューやアイスキャンドルづくりなどが行われている。（かわたびほっかいどう より）
自然	マサリベツ望洋の森	千望台の対局の丘にあり、高さ 9m の風力発電機付きモニュメントが置かれ、留萌市、暑寒別連峰、積丹半島が一望できる。背後の森にはヤマザクラ・キタコブシなど 30 種 2 万本が植樹され、散策路もつくられている。
自然	るもっぺ憩いの森	るもっぺ憩いの森は、昭和 63 年（1988 年）に地域住民の森林レクリエーションの場として開設され、今日まで市民の森林における憩いの場として親しまれている。 入り口から中央部の北海道をかたどった池の周辺まで、様々な樹種の豊かな森の広がりの中、およそ 2.8km の遊歩道が設置されており、途中、日本海や市街地を望む景勝スポットもある。

※出典：留萌市ウェブサイト、留萌観光協会

表 2-2(2) 主な観光対象

項目	名称	概要
イベント	かずの子のマチ 留萌フェスタ	5月5日が「かずの子の日」に認定されたことにちなみ、日本一のかずの子をPRする。
イベント	うまいよ！るも い市	ウニ、エビ、ホタテなどの地場産品の即売会や留萌南部地域の出店者によるグルメ屋台などの開催。
イベント	るもい呑涛まつ り	やん衆あんどんパレードほか。
イベント	やん衆盆踊り	露店や子ども縁日など、小さなお子様からご年配の方まで楽しめるイベント。 仮装盆踊りコンテストでは個性的な衣装で踊る参加者で会場が盛り上がる。
イベント	るもいシーサイ ドキャンプ	ゴールデンビーチるもいを会場としたキャンプイベント（事前予約制） 砂浜でのアトラクションや、夕陽を見ながら留萌名物の浜焼きなどを楽しむことができる。
イベント	るもい川まつり	「E ボート大会」、「縁日コーナー」、「グルメ屋台」、豪華景品が当たる「川まつり抽選会」など、家族で楽しめる市民参加型のイベント。
イベント	萌っこ春待里	萌えっこばんぱレースや大抽選会、グルメ屋台等も出店される、市民手作りのイベント。

※出典：留萌市ウェブサイト、留萌観光協会



黄金岬海浜公園



千望台



海のふるさと館



礼受牧場(礼受牧場畜産館トリム)

※出典：留萌市ホームページ

写真 2-13 主な観光対象

(2) 文化財・史跡

留萌川流域には、国や道による指定を受けた文化財及び史跡は無い。

しかし、流域の歴史、文化を代表するものとしては表 2-3 に示すように、埋蔵文化財としての縄文土器、18 世紀に始まる留萌神社、郷土民芸である獅子舞等が継承されている。

表 2-3(1) 留萌川流域の埋蔵文化財の現況

名称	所在地	種別	時代	立地	標高	出土遺物
幌糠 1 遺跡	留萌市大字留萌村字幌糠 1815-2・6, 3071, 3072, 3075, 3098, 3099, 3102, 3103, 3767, 3768	遺物包 含地	不明	ポロヌカベツ 川左岸段丘	25 m	石鏃
幌糠 2 遺跡	留萌市大字留萌村字幌糠 3096, 3097, 3769, 3900	遺物包 含地	不明	ポロヌカベツ 川左岸段丘	25 m	石鏃
南幌糠遺跡	留萌市大字留萌村字幌糠 1894, 3093, 3496～3498	遺物包 含地	縄文	留萌川右岸段 丘	30 m	石斧・石 斧剥片、 石鏃、石 包丁
春日神社遺跡	留萌市春日町 2 丁目 10, 41- 2, 44-6, 大字留萌村字マサリ ベツ 357, 2695-1	遺物包 含地	不明	マサリベツ沢 右岸	20 m	石鏃、石 斧
マサリベツ遺 跡	留萌市大字留萌村字マサリ ベツ 221-1～6	遺物包 含地	不明	海岸砂丘、留 萌川右岸、マ サリベツ沢両 岸	5 m	
春日町高台遺 跡	留萌市大字留萌村字マサリ ベツ山ノ上 166-1・21・31, 大 字留萌村字マサリベツ 751	遺物包 含地	縄文	海岸段丘	25 m	
自衛隊遺跡	留萌市緑ヶ丘町 1 丁目 18～ 28	遺物包 含地	縄文(中 期)	留萌川左岸 独立丘	50 m	ポイント

表 2-3(2) 歴史、文化的施設等一覧表

No.	名 称	内 容
1	埋蔵文化財	流域内には縄文早期時代の土器が最古のものとして確認されている。特に北海道は、北東アジア地方と本州の2つの文化要素を受け入れられた独自の文化を形成したころから、これら遺跡の発掘は、歴史的に重要である。
2	留萌神社	天明 7 年(1787 年)、ルルモッペ領の支配人松前藩主が ^{あきのくにいつくしま} 安芸国 厳 島神社の分霊を懇請して建てられたのが始まり。神名、位置も数回変わり、今日に至っている。また、境内林の緑地なども美しく、環境緑地保護地区に指定(昭和 49 年 3 月 30 日道告示第 1020号)されている。
3	獅子舞	郷土民芸の1つである獅子舞は、各所で行われていた。その流れは、農村方面は ^{えつちゅうとやま} 越 中 富山から伝わったもので、漁村方面は ^{しもきた} 青森県下北地方の南部系神楽の流れをくむものであった。現在保存継承されているのは、越中系獅子舞では ^{ほろぬか} 幌糠獅子舞、 ^{たるまっぶ} 樽真布獅子舞、南部系神楽では、 ^{るもいいわと} 留萌岩戸神楽、 ^{れうけ} 留萌礼受神楽の4つである。
4	留萌黒潮太鼓	昭和 43 年8月、北秋二郎外3名が登別温泉地獄祭りで行われた「北海道盆踊り太鼓競演会」に出場し、上位の賞を独占する。その夜、芸術としての太鼓の団体を作ることを全員で誓い合ったことが始まりで、昭和 46 年 11 月に今日の姿ができあがった。レパートリーとしては第1作「留萌の四季」、第2作「激流の暑寒太鼓」、第3作「ソーラン太鼓」、第4作「北海駒牧太鼓」の四作がある。
5	海のふるさと館	繁栄を極めた鯨漁と鯨のルーツを探る先人の偉業などの展示や、留萌川流域の自然史や昆虫類などについての展示も豊富。

2-4 河川環境を取り巻く背景

河川の利用については、うるおいとやすらぎを得られるオープンスペースとして、市街地付近に公園や階段護岸等が整備され、散策等に利用されている。また、河川空間を利用し、下流部でもい川まつりなどのイベントが行われている。さらに、中流部で「幌糠水辺の楽校」が整備され、流域の小学校の児童が参加する川の自然観察会が行われている。

このように留萌川流域では、各地域の特色を活かし、まちづくりと一体となった整備や河川利用がなされ、環境学習や体験イベントといった水辺空間の利用を通じて、留萌川の魅力や川を軸とした歴史・文化の発信に関する新たな取組が積極的に行われている。

また、地域連携を深めるための情報交換、人的交流の促進を目的として、河川に精通する団体等により、河川の維持、河川環境保全等の河川管理につながる活動が自発的に行われるなど、様々な住民活動が展開されている。流域における代表的な活動を表 2-4 に示す。

表 2-4 留萌川に関する市民活動

団 体 名	目 的
留萌エコ村	留萌ダム水源地域の留萌市、住民等がダム事業者・管理者と協同で平成 18 年（2006 年）10 月から検討会を重ね、ダム周辺の環境保全や楽しく交流する活動を地域全体に広げていきたい思いから平成 20 年（2008 年）9 月 28 日に留萌エコ村を開村し、平成 20 年（2008 年）11 月 20 日に留萌エコ村構想（留萌ダム水源地域ビジョン）を作成した。
ルルモッペ河川愛護の会	昭和 63 年（1988 年）8 月の留萌川の水害がきっかけとなり、平成元年（1989 年）6 月に発足した。留萌川が将来とも市民の散策、憩いの場として活用され、また川に親しんでもらうため、地元の建設業者等が集まり、ボランティアとして、年 1～2 回の河川清掃、留萌川の環境整備に協力している。

2-5 自然公園等の指定状況

留萌川流域では、天然林や緑地、そこに住む野鳥や哺乳類が豊かで、景勝地として市民に親しまれており、環境緑地保護地区、鳥獣保護区、都市計画区域等、各種地域指定されている。

(1) 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律に基づく鳥獣保護区

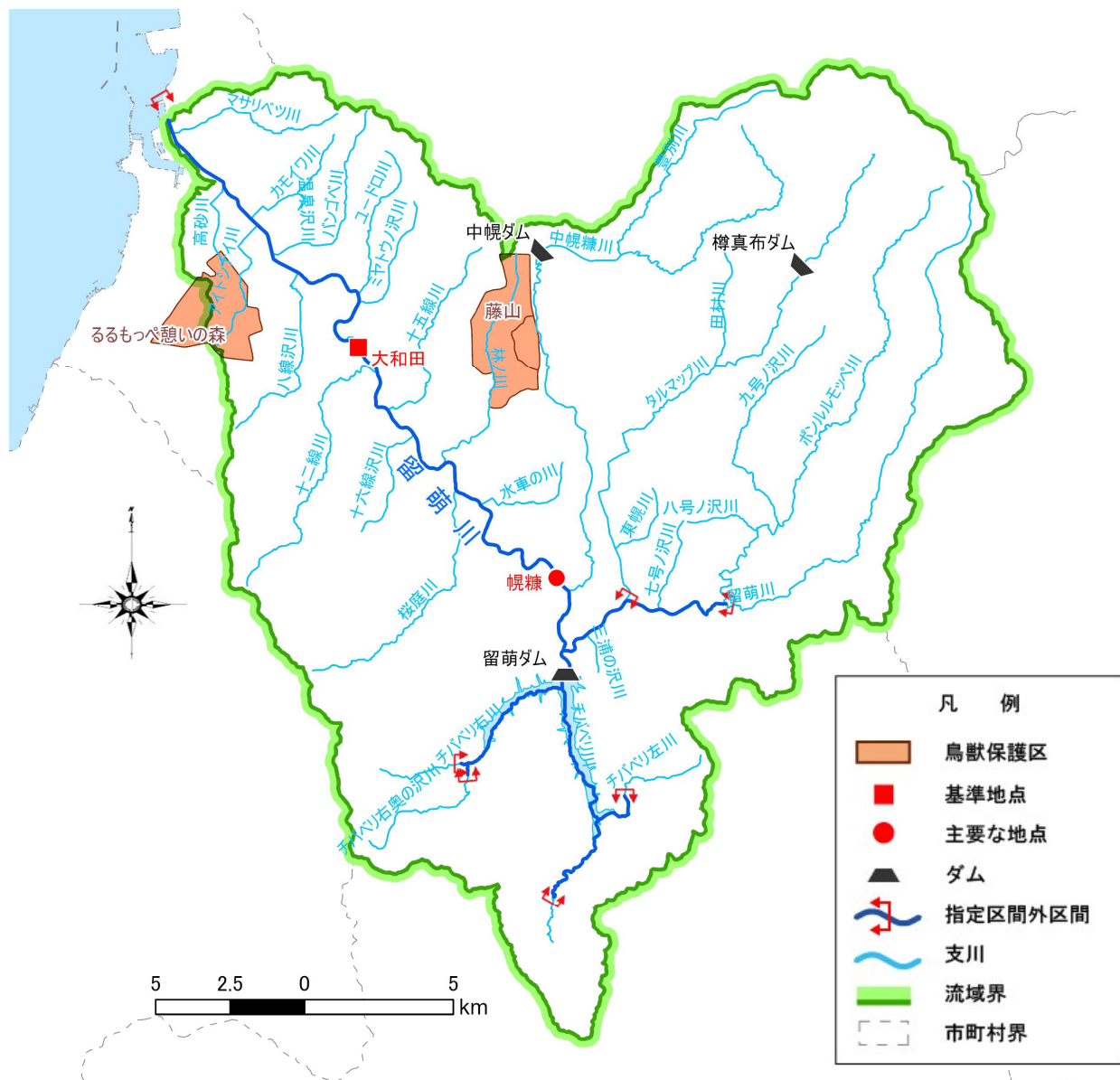
2ヶ所で鳥獣保護区が指定されている。

表 2-5 各種保護地区指定一覧

(鳥獣保護区等区域)

整理 番号	市町村	鳥獣保護 区名	区 域	存続期間	備 考
165	留萌市	藤山	留萌市に所在する国有林留萌南部森林管理署 189 林班から 191 林班までの区域 〔特保〕道指定藤山鳥獣保護区のうち、 国有林留萌南部森林管理署 189 林班い、 イ及びロ小班の区域	H5.10.1 ～H25.9.30 (R5.9.29 第 461 号 〔特保 第 462 号〕)	森 林 鳥 獣 生 息 地 399ha 〔特保 45ha〕
175	留萌市	るるもっぺ 憩いの森	留萌市に所在する道有林留萌経営区 56 林班並びに 57 林班 01 から 04 まで、52 及び 54 から 62 までの各小班並びに留萌 市礼受町 680 番地 2 及び 680 番地 6、見 晴町 7 丁目 1 番地並びに大字留萌村 1571 号) 番地 4 の区域	H25.10.1 ～H45.9.30 (H25.9.27 第 626	身 近 な 鳥 獣 生 息 地 245ha

※出典：令和 6 年度鳥獣保護区等位置図 別冊編（北海道）



※国土数値情報（河川・海岸線・行政区域・鳥獣保護区）（国土交通省）を加工して作成
 ※出典：令和4年度鳥獣保護区等位置図 別冊編（北海道）

図 2-9 留萌川流域における自然環境概要図

3. 流域の社会状況

3-1 土地利用

土地利用では、河川沿いには扇状地性低地が細長く分布し、その中上流部では水田地帯が形成されている。河口付近には、三角州性低地が分布し、そこには港湾施設・工場・住宅・公共施設等が密集して市街地を形成している。

留萌市全体の面積に対する流域面積の割合は、約 91%である。

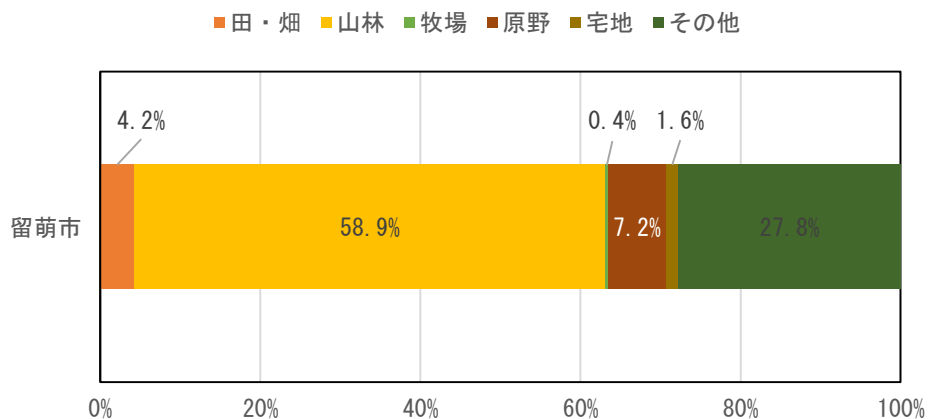
留萌川流域の土地利用用途別構成比は国有林・道有林等の山林が約 90%を占め、水田・畑等の農耕地が約 5%、市街地等が約 5%である。農耕地としての利用は、水田がほとんどを占めており中上流部を中心に営まれている。また、市街地は下流部を中心に密集している。

表 3-1 留萌市における土地利用状況

(単位:km²)

区分	田	畑	宅 地	鉱泉地	池 沼	山 林	牧 場	原 野	雑種地	その他
留 萌 市	9.65 (3.2%)	2.88 (1.0%)	4.69 (1.6%)	0.00 (0.0%)	0.03 (0.0%)	175.47 (58.9%)	1.06 (0.4%)	21.39 (7.2%)	5.85 (2.0%)	76.82 (25.8%)

※出典：北海道統計書（R6）（平成 30 年～令和 4 年値）



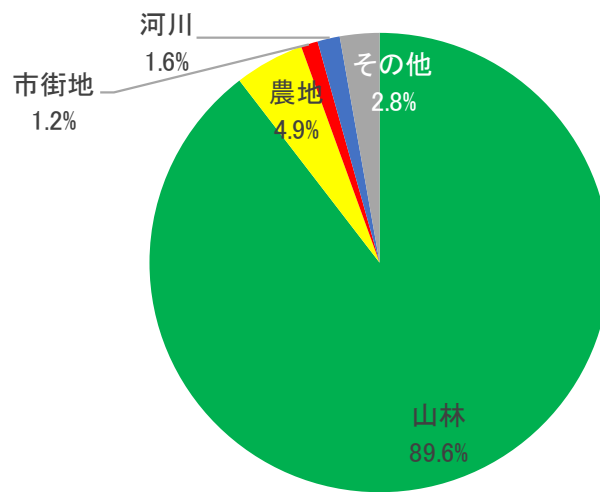
※出典：北海道統計書（R6）（平成 30 年～令和 4 年値）

図 3-1 留萌市における土地利用状況

表 3-2 地目別土地利用の割合（留萌川流域）

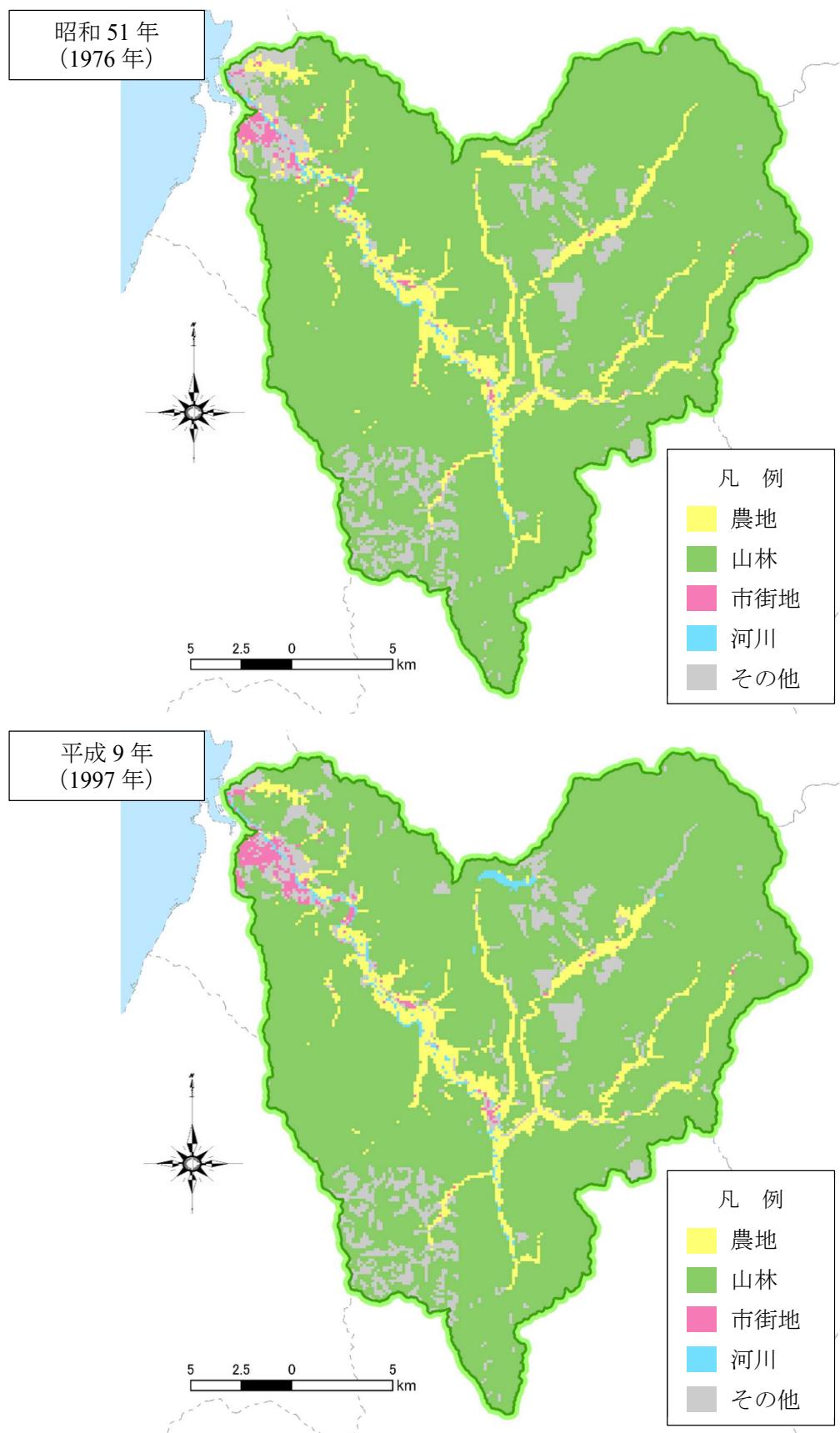
	山林	農地	市街地	河川	その他
昭和51年	83.7%	7.3%	0.8%	0.6%	7.7%
平成9年	83.3%	6.9%	1.1%	0.8%	7.9%
平成21年	89.3%	5.0%	1.2%	0.7%	3.8%
平成28年	89.5%	4.9%	1.2%	1.6%	2.8%
令和3年	89.6%	4.9%	1.2%	1.6%	2.8%

※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（S51、H09、H21、H28、R03）



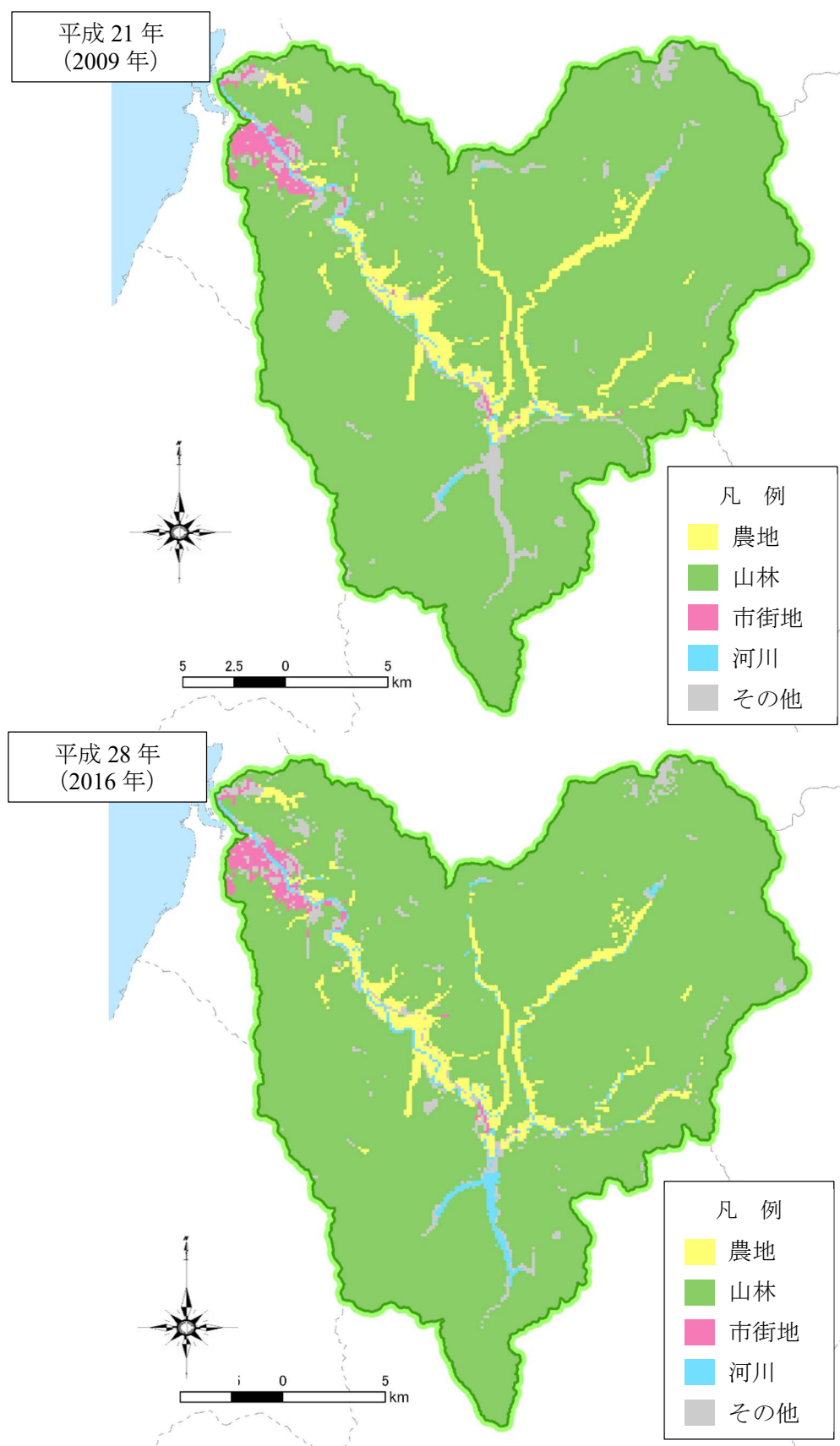
※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（R03）

図 3-2 地目別土地利用の割合



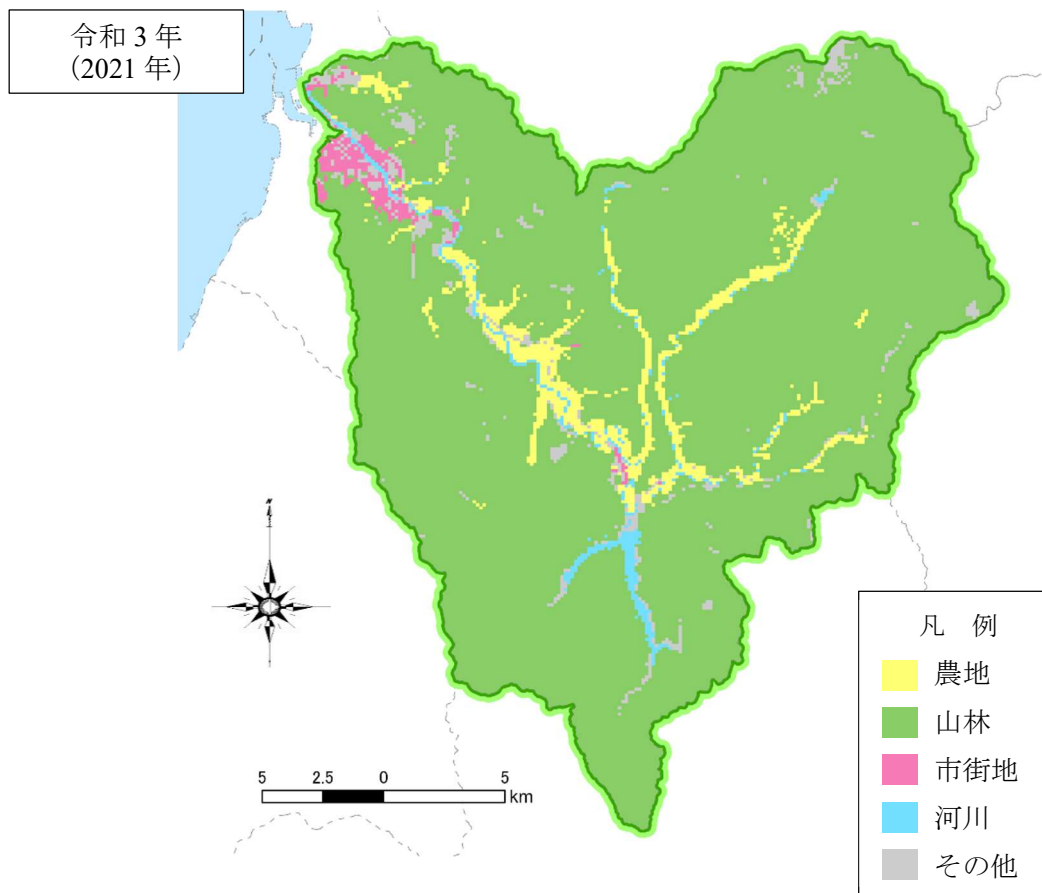
※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（S51、H09）

図 3-3 (1) 留萌川流域の土地利用の変遷



※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（H21、H28）

図 3-3 (2) 留萌川流域の土地利用の変遷



※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（R03）

図 3-3 (3) 留萌川流域の土地利用の変遷

3-2 人口

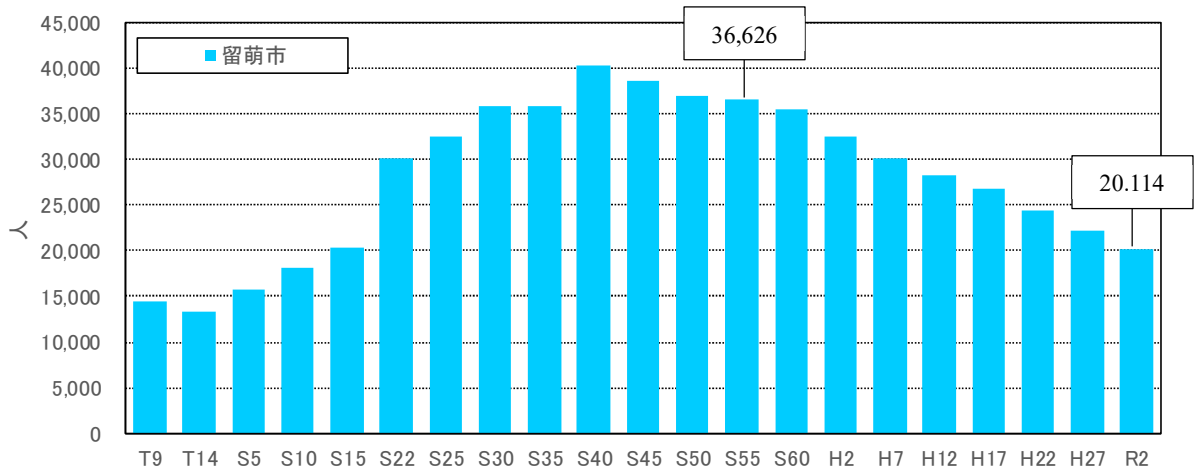
留萌川流域の関係市町村は留萌市1市からなり、その人口は、昭和55年（1980年）と令和2年（2020年）を比較すると、約3万7千人から約2万人へと減少する一方、高齢化率は約8%から約37%へと大幅に増加している。

平成26年（2014年）時点の流域内人口は約17,300人である。なお、流域内人口は留萌市の人口の約86%を占め、人口密度は64.0人/km²である。

表 3-3 流域にかかる留萌市の概要

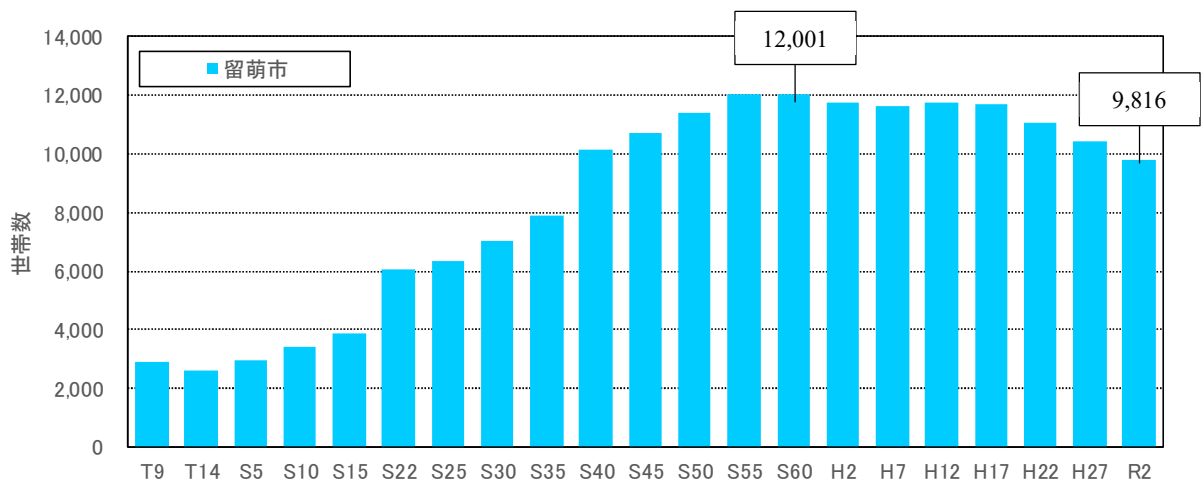
区分	留萌市	流域内
面積 (km ²)	298	270
総人口 (人)	20,114	17,335
世帯数 (世帯)	9,816	7,581
人口密度 (人/km ²)	68	64

※人口はR2国勢調査人口を採用。流域内はH26河川現況調査。



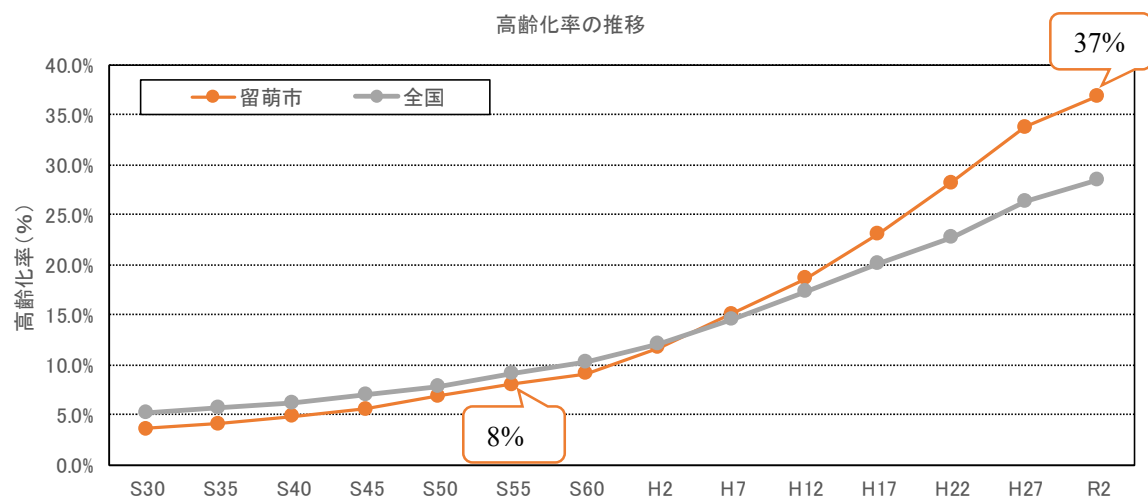
※出典：国勢調査

図 3-4 人口の推移



※出典：国勢調査

図 3-5 世帯数の推移



※出典：国勢調査

図 3-6 高齢化率の推移

3-3 産業と経済

流域内の産業は、全国生産高の約 5 割を占めるカズノコの生産等を始めとした水産加工業が盛んであり、また、サービス業・小売業など、第 3 次産業の就労者が産業人口の約 7 割を占めている。また、稲作、小麦等を中心とした農業が盛んである。

留萌川流域における 15 歳以上就業者総数は 9,769 人で、流域内人口 17,335 人（平成 26 年（2014 年）河川現況調査）の 50%を占めている。

産業別就業者数を見ると、第 1 次産業の占める割合は 3%で全道平均と比較すると低い比率となっている。第 2 次産業は、20%と全道平均よりやや多い程度であるが、全国平均よりは若干低い。第 3 次産業は 76%で、全国平均よりも高い比率を占めている。

表 3-4 留萌市における産業別就業者数

区 分	留 萌 市	
	人口 (人)	構成比 (%)
第1次産業	320	3.3%
第2次産業	1,941	19.9%
第3次産業	7,508	76.9%
計	9,769	100.0%

※出典：R2 国勢調査による

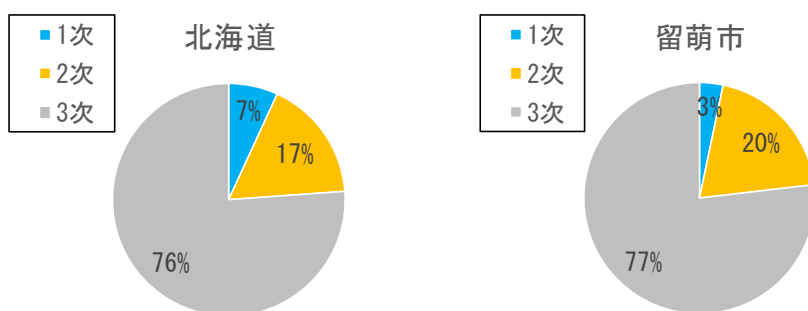


図 3-7 産業別就業者数の割合（令和 2 年国勢調査）

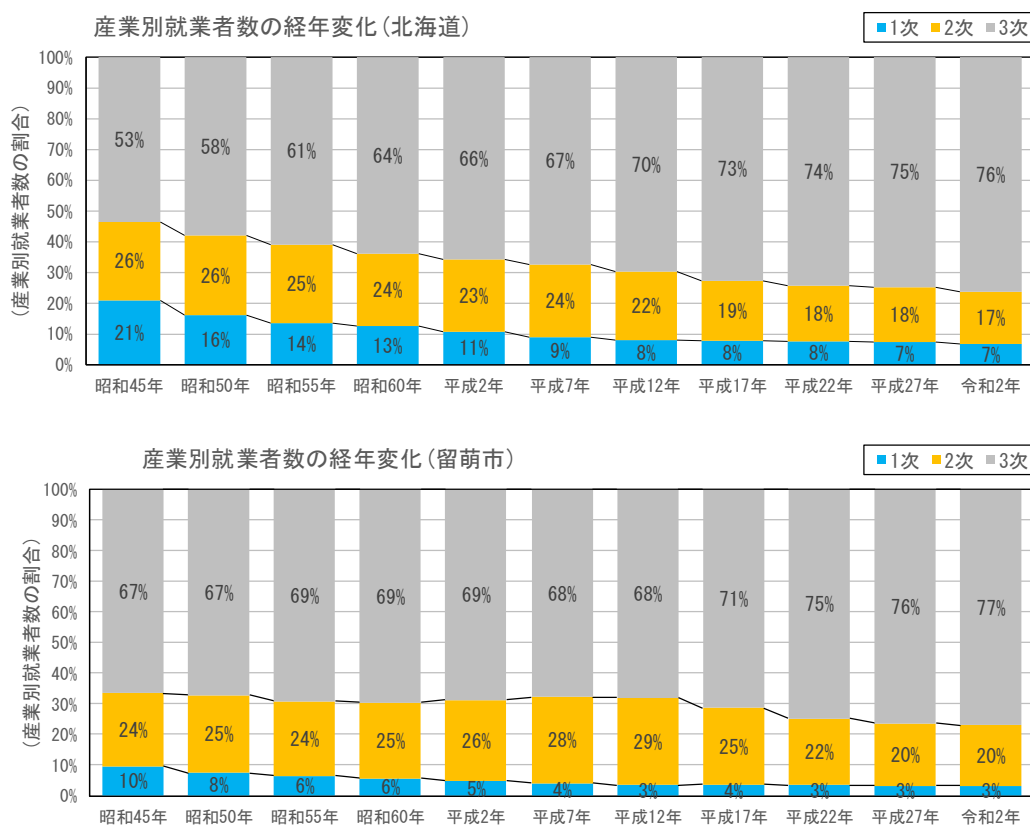
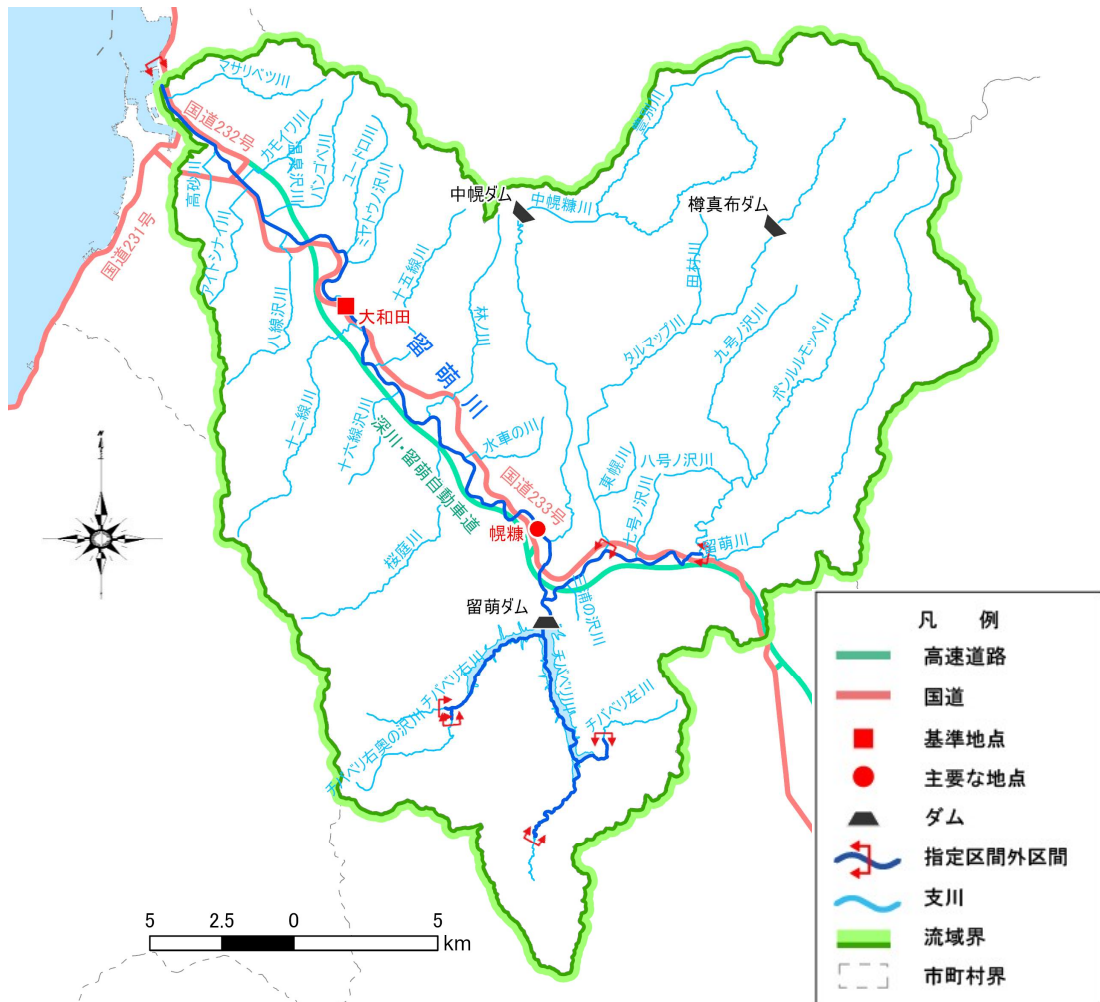


図 3-8 産業別就業者数の経年変化（昭和 45 年～令和 2 年国勢調査）

3-4 交通

留萌川流域では、国道 233 号線が並行しながら留萌川沿いを走り、留萌市で国道 231 号線・232 号線と合流しているほか、平成 4 年（1992 年）には、高規格幹線道路としての深川・留萌自動車道が着手となり、令和 2 年（2020 年）に留萌大和田 IC～留萌 IC 間が開通し全線開通している。また、留萌川の河口には、重要港湾である留萌港があり、主要道路と結びついて道北の玄関口として北海道の経済活動を支えている。また、近年ではフェリー航路の誘致活動が活発であり、今後、観光を含めてますますの発展が見込まれる。

流域内には、恵まれた自然と、豊かな歴史・風土に培われてきた多数の名勝地や景勝地等がある。特に、南は小樽^{おたる}から北は稚内^{わっかない}までの国道・道道で結ばれる 327km に及ぶ沿海ルートと、天売^{てうり}・焼尻^{やぎしり}・利尻^{りしり}・礼文^{れぶん}の 4 離島航路は「オロロンライン」と呼ばれ、この中継点に位置する留萌市は暑寒別天売焼尻国立公園に挟まれ、それに続く利尻礼文サロベツ国立公園等、北海道西海岸の魅力あふれる観光ルートの表玄関となっている。



※国土数値情報（高速道路時系列・道路データ・河川・海岸線・行政区域）（国土交通省）

を加工して作成

図 3-9 留萌川流域における道路網位置図

3-5 関係ある法令の指定状況

(1) 第9期北海道総合開発計画

第9期北海道総合開発計画では、2050年の北海道の将来像に向け、「我が国の豊かな暮らしを支える北海道～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」、「北海道の価値を生み出す北海道型地域構造～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり」を目標としている。

留萌川流域は、北海道の北西部に位置し、ニシン漁とともに発展し、日本一の生産性を誇る「かずの子」をはじめとした水産加工業に加え、農業についても道内有数の良食味米産地として高く評価され、畑作物では、留萌地域のみ生産される超硬質小麦ルルロッソを使用した生パスタが北のハイグレード食品に認定されるなど、食料基地として重要な役割を果たしている。

また、国の重要港湾「留萌港」と国道3路線の終点、さらに高規格幹線道路深川・留萌自動車道の終点に位置する交通・物流の拠点となり、道央圏・道北圏と留萌地域を結ぶ交通の要衝となっている。

留萌川流域は、北海道総合開発計画の長期ビジョンや目標を踏まえたうえで、日本及び世界に貢献する自立した北海道の実現に向け、安全でゆとりある快適な地域社会の形成、食料供給力の確保・向上、流域の人々の連携・協働による地域づくりを通じ、北海道北西部の地域を先導する役割を果たす必要がある。

このような留萌川流域の将来像を実現するため、地域住民や関係機関が連携し、水産業農業及び観光業等の地域産業が持続的に発展できる安全で活力に満ちた地域社会の形成を図る必要がある。

加えて、北海道は気候変動による影響が大きく、これに伴う降雨量増大が懸念される。そのため、次世代に防災・減災にかかわる負の遺産を継承することのないよう、気候変動の進行に対応した時間軸の中で、適応策の展開や社会・経済活動の変化等を総合的に評価し、合理的かつ段階的に進めていくことが重要である。

第9期北海道総合開発計画の構成

前文 第9期北海道総合開発計画の策定に当たって

第1章 計画策定の意義

第1節 北海道開発の経緯

1. 北海道開発の歴史
2. 第8期北海道総合開発計画の経緯

第2節 第9期北海道総合開発計画の意義

第2章 計画の目標

第1節 我が国を取り巻く状況

1. 人口減少・少子高齢化と人口動態の変化
2. 気候変動と自然災害の激甚化・頻発化
3. 社会を変えるデジタル技術
4. 国際情勢の変化

第2節 北海道の資源・特性

1. 広大な大地
2. 食料供給力
3. エネルギー・資源
4. 自然環境・文化
5. 地理的特性・寒冷地技術

第3節 2050年の北海道の将来像

1. 国の課題解決のために果たすべき役割
2. 将来像
3. 将来像を支える社会基盤
4. 将来像を実現するために進むべき方向性

第4節 第9期北海道総合開発計画の目標

- 目標1「我が国の豊かな暮らしを支える北海道
～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道～」
- 目標2「北海道の価値を生み出す北海道型地域構造
～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり～」

第3章 計画推進の基本方針

第1節 計画の期間

この計画の期間は、2024年度からおおむね10年間とする

第2節 計画の主要施策

第3節 計画の進め方

1. リアルとデジタルのハイブリッドによる北海道型地域構造の保持・形成
2. 計画の実効性を高めるための方策
 - (1) 官民の垣根を越えた「共創」
 - (2) 社会変革の鍵となるDX・GXの推進
 - (3) フロンティア精神の再発揮
 - (4) 戦略的・計画的な社会資本整備
3. 計画のマネジメント

第4章 計画の主要施策

第1節「我が国の豊かな暮らしを支える北海道～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」に係る主要施策

1. 食料安全保障を支える農林水産業・食関連産業の持続的な発展
2. 観光立国を先導する世界トップクラスの観光地域づくり
3. 地球温暖化対策を先導するゼロカーボン北海道の実現
4. 地域の強みを活かした成長産業の形成
5. 自然共生社会・循環型社会の形成
6. 北方領土隣接地域及び国境周辺地域の振興
7. アイヌ文化の振興等

第2節「北海道の価値を生み出す北海道型地域構造～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり」に係る主要施策

1. デジタルの活用による生産空間の維持・発展
2. 多様で豊かな地域社会の形成
3. 北海道型地域構造を支え、世界を見据えた人流・物流ネットワークの形成
4. 生産空間を守り安全・安心に住み続けられる強靱な国土づくり

第9期北海道総合開発計画 主要施策1

「他で代替できない北海道の価値」を最大化し、現下の国の課題解決を先導

食料安全保障

全国約24%の食料生産（カロリーベース）

生産量全国一の農畜産物・水産物
小麦、ばいれいしょ、たまねぎ、生乳等
ホタテ、タラ、サケ・マス、ホッケ等

観光立国の再興

感染症拡大前の直近5年間で
来道外国人旅行者数 164万人増
(平成26年137万人⇒令和元年301万人)
都道府県魅力度 15年連続全国一

2050カーボンニュートラル

全国一の再生可能エネルギー賦存量
洋上風力、陸上風力、太陽光、
森林吸収、バイオマス、
ブルーカーボン、中小水力

北海道のポテンシャルを活かし、我が国の豊かな暮らしを支える
～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道～

主要施策

1. 食料安全保障を支える農林水産業・食関連産業の持続的な発展
2. 観光立国を先導する世界トップクラスの観光地域づくり
3. 地球温暖化対策を先導するゼロカーボン北海道の実現
4. 地域の強みを活かした成長産業の形成
5. 自然共生社会・循環型社会の形成
6. 北方領土隣接地域及び国境周辺地域の振興
7. アイヌ文化の振興等

スマート農業導入による生産性向上



※ 北海道開発局は地方整備局の機能に加え、農業基盤整備を所掌



再エネ海域利用法に基づく洋上風力の区域状況



出典：Rapidus株式会社作成、作図協力 鹿島建設



出典：SPACE COTAN株式会社



観光資源JAPOW (Japan Powder Snow)



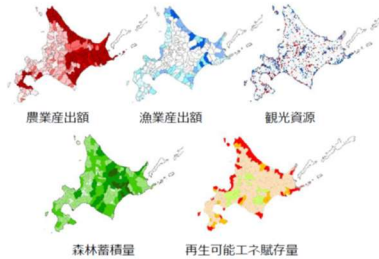
民族共生象徴空間ウポポイ(白老町) 誘客促進

図 3-10(1) 北海道総合開発計画の概要

第9期北海道総合開発計画 主要施策2

北海道の価値を生み出す生産空間の定住環境を維持

北海道の価値を生む 「生産空間」の分布



北海道の生産空間の構造的課題 【定住環境の厳しさ＝二重の疎】



+ 積雪寒冷の厳しい気候、千島海溝地震の切迫

北海道の価値を生み出す北海道型地域構造の維持 ～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり～

主要施策

1. デジタルの活用による生産空間の維持・発展
2. 多様で豊かな地域社会の形成
3. 北海道型地域構造を支え、世界を見据えた
人流・物流ネットワークの形成
4. 生産空間を守り安全・安心に住み続けられる
強靱な国土づくり



図 3-10(2) 北海道総合開発計画の概要

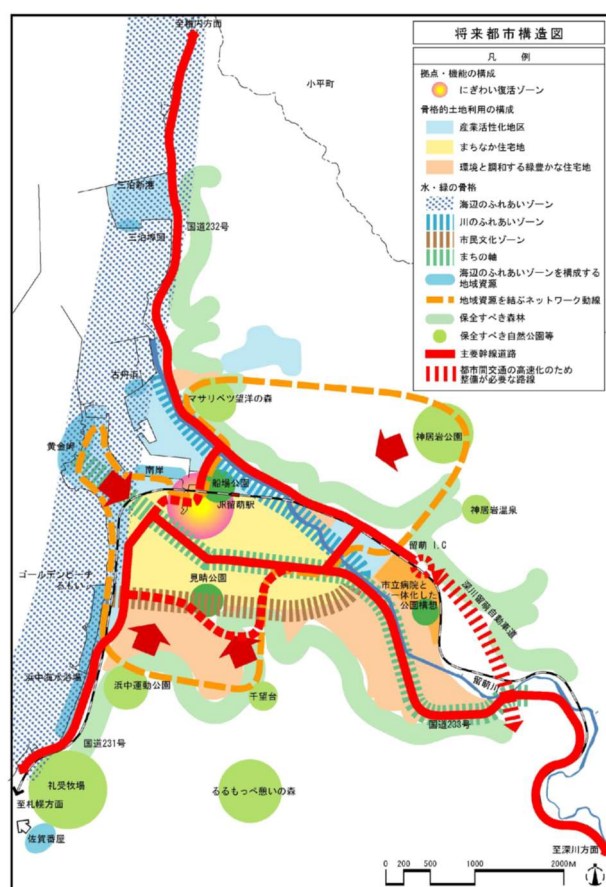
(2) 地域プロジェクト及び都市計画

留萌川流域に関連する地域プロジェクトは、留萌市都市計画マスタープランがある。

留萌市の市街部は、留萌川下流の左岸に、日本海・丘陵地に囲まれた低地に形成されており、約 4,410ha が都市計画区域に指定されている。用途地域は、重要港湾留萌港を中心に商業系・工業系の土地利用が配置され、その周辺部は留萌川を中心に住居系の土地利用が配置されている。また、留萌川の右岸には深川留萌自動車道と国道 232 号、左岸には都市計画道路が並走している。

表 3-5 留萌川流域に関連する地域プロジェクト

プロジェクト名	概要	事業主体
留萌市都市計画マスタープラン	都市づくりの課題に適切に対応するため、『留萌市都市計画マスタープラン』を策定している。本計画では、『活力に満ち、質的な豊かさを感じるまち・るもい』を基本理念として、“息長く活力やにぎわいを維持できるコンパクトなまち”、“市民が身近に、親しみをもって暮らせるまち”、“歴史や記憶、雄大な自然を尊重し、共に生きていくまち”を基本目標に掲げその実現に向け様々な創意工夫のもと、市民と行政が協働して推進している。	留萌市



※出典：留萌市都市計画マスタープランより

図 3-11 留萌市都市構造図

4. 水害と治水事業の沿革

4-1 既往洪水の概要

留萌川における代表的な洪水としては、昭和 30 年（1955 年）7 月、同年 8 月、昭和 50 年（1975 年）8 月、同年 9 月、昭和 56 年（1981 年）8 月、昭和 63 年（1988 年）8 月洪水が挙げられる。これらの洪水の中でも特筆すべき出水は昭和 63 年（1988 年）8 月洪水であり、その被害の大きさから直轄河川激甚災害対策特別緊急事業（以下「激特事業」という）に採択されている。この出水により、各地で計画高水位を超える既往最高水位を記録し、上中流部の低平地の大部分が冠水し、さらには、人口が集中する下流市街地の約 1/3 が浸水し、留萌市の機能は完全に麻痺した。

浸水家屋数は 3,376 戸に達し、全家屋数の 26%が浸水したほか、被災人口は 9,499 人で同様に全市の 28%、浸水面積は 1,290ha となり、流域平地面積の 34%が浸水した。これにより、道路・鉄道・工場・公共施設等が浸水し一時は陸の孤島と化し、市民生活への大きな打撃を与え社会不安となるなど、大きな災害となった。

(1) 昭和 30 年（1955 年）8 月洪水

7 月の洪水で家屋浸水 986 戸、農地冠水 400ha の被害を出したばかりであった。

留萌に、更に追い討ちをかけるように水害が見舞った。8 月 17 日夜半から 18 日未明にかけて旭川地方を中心に襲った雷雨は、留萌地方にも大雨をもたらした。18 日午前 9 時現在で留萌 107mm、峠下 140mm に達し、留萌川は上流の峠下～幌糠間で氾濫し、国道上の木橋が流出し、国鉄留萌線の鉄橋にひっかかったため留萌線は幌糠からの上りは運休し、更に留萌川の水かさが増したため、峠下 30 戸、幌糠全町 100 戸、藤山町の 50 戸はほとんど床上浸水し、付近農村はほとんど冠水した。峠下での総雨量は 2 日間で 201.4mm に達した。また、市街地でも床上、床下浸水もあり、留萌市全体では家屋全壊 6 戸、半壊 15 戸、家屋浸水 3,135 戸、農地被害 1,882ha という大きな被害が出た。また、農村地帯の田畑はほとんど冠水し、出来秋を目の前に農家の落胆は目を覆うばかりであった。



冠水した大和田地区



浸水の激しかった市街



写真出典：潤いと憩の明日～留萌川激特事業の記録

写真 4-1 被害状況（昭和 30 年（1955 年）8 月洪水）

(2) 昭和 50 年（1975 年）8 月洪水

8 月 22 日アムール川下流域において発達した低気圧から南に伸びる寒冷前線が、夕刻には北海道の西岸に達し、西部海岸地方では昼すぎから雨となり、夕刻には雷を伴った。寒冷前線は、22 日夜から 23 日夜半にかけ北海道を北東から南西に縦断するような形で停滞した。一方、台風第 6 号が北上してその前線を刺激したため活動は活発になり、8 月 22 日からの 2 日雨量は大和田観測所で 167.7mm を記録する大雨となった。

このため、流域各所で氾濫し、家屋浸水 44 戸、農地被害 219ha、橋梁流失など大きな被害が発生した。



大和田市街地



栄萌橋より上流部の流水状況



落橋寸前の大通り橋

写真出典：潤いと憩の明日～留萌川激特事業の記録

写真 4-2 被害状況（昭和 50 年（1975 年）8 月洪水）

(3) 昭和 50 年（1975 年）9 月洪水

8 月末頃から、例年になく勢力が強くなった太平洋高気圧は、9 月に入っても本州から北日本に張り出し、全道的な高温がつづいた。一方、オホーツク海北部には冷たい高気圧が現れ、これら二つの高気圧の間に発生した前線が、2 日から北海道のほぼ中央を横切り 9 日まで停滞した。この間、太平洋高気圧の周辺を回る湿潤な暖気が北海道に流入し、前線活動を活発にさせたため、留萌地方は 7～8 日にかけて集中豪雨に見舞われ、大和田観測所での 2 日雨量は、99.4mm に達した。

台風第 6 号による被害直後でもあり、家屋浸水 91 戸、農地被害 355ha、橋梁流失 5 ヶ所、道路損壊など大きな被害が発生した。

(4) 昭和 56 年（1981 年）8 月洪水

沿海州からオホーツク海へ進んだ低気圧から南西にのびる寒冷前線が、3 日夕方から 6 日にかけて北海道中央部に停滞した。

留萌地方は、8 月 3 日夕方より、この停滞前線の影響で継続的に強い雨が降り続いた。

一方、3 日に発生した中型で並の台風第 12 号は、5 日に入って北海道に接近し前線を刺激したため、留萌地方は更に強い雨となった。

8 月 3 日からの 2 日雨量は、大和田観測所で 169.4mm に達した。

このような豪雨より、4 日夜、上流の峠下で留萌川が氾濫し、5 日早朝には各所で冠水・孤立する家屋が続出し、市街部においても外水、内水氾濫を引き起こした。

また、国道、鉄道などの交通機関は、土砂崩れ・冠水等で全面不通となった。

留萌川全域に発生した被害は、家屋半壊 1 戸、床上浸水 95 戸、床下浸水 125 戸、農地被害 504ha、橋梁流失 10 ヶ所、道路損壊 58 ヶ所など大きな被害が発生した。



大和田付近



ポンプ車による排水作業

写真出典：潤いと憩の明日～留萌川激特事業の記録

写真 4-3 被害状況（昭和 56 年（1981 年）8 月洪水）

(5) 昭和 63 年（1988 年）8 月洪水

日本海に気圧の谷が進み、24 日に停滞前線が発生し、この停滞前線に熱帯低気圧から高温多湿な空気が流れ込み、前線の活動が活発となった。この停滞前線はゆっくり南東に移動して、25 日の昼過ぎ留萌地方にかかったところ、高さ 10,000m 前後の強い雨雲が流れ込み、雨が降り出した。

とくに、20 時から 21 時にかけての時間降雨量は、中上流部で 60mm を越し、25 日からの 2 日雨量は大和田観測所で 319.5mm に達する豪雨となった。

25 日夜半から 26 日早朝にかけては、各所で計画高水位を超え、大和田観測所で既往最高水位を記録した。

そのため、中上流の低平地は全て冠水し、さらには、留萌市の人口のほとんどが集中する市街部の約 1/3 が冠水した。

この豪雨により、流域内人口の約 5 割を占める 9,499 人が浸水被害を受け、床上浸水 1,270 戸、床下浸水 2,106 戸、農地被害 623ha、橋梁流失 13 ヶ所、道路損壊 74 ヶ所、土砂くずれ 62 ヶ所、国道・JR などの全面不通を始めとし甚大な被害を受けた。

・留萌市街



留萌中心部



市道北 8 条通り



市道開運 5 号通り

写真 4-4(1) 被害状況（昭和 63 年（1988 年）8 月洪水）

写真出典：潤いと憩の明日～留萌川激特事業の記録

・大和田地区



塩州橋落橋



大和田アンダーパス



大和田市街

・藤山地区



水没した畑

写真 4-4(2) 被害状況（昭和 63 年（1988 年）8 月洪水）

写真出典：潤いと憩の明日～留萌川激特事業の記録

・幌糠地区



幌糠地区空撮



流木と新水橋

・峠下地区



洗堀された河岸

写真出典：潤いと憩の明日～留萌川激特事業の記録

写真 4-4 (3) 被害状況（昭和 63 年（1988 年）8 月洪水）

(6) 平成 30 年（2018 年）7 月洪水

7 月 2 日から 4 日にかけて北海道付近に停滞する前線に向かって暖かく湿った空気が流入し、大気が不安定な状態になる中、台風第 7 号から変わった温帯低気圧が北海道付近を通過した。このため、3 日未明から明け方まで留萌南部と上川中部を中心に激しい降雨となった。また、5 日には台風から変わった温帯低気圧により上川中部・南部では強い雨が降り、大雨となった。上川・留萌地方では、降り始めの 2 日 9 時から 5 日 24 時までの降水量は、旭川市瑞穂で 225.0mm、小平町達布で 198.5mm など、上川・留萌地方の多くの地点で平年の 7 月一月分の雨量を上回る大雨となり、日降水量、日最大 1 時間が年間及び 7 月の一位となる降雨となった。

留萌川では、7 月 2 日からの大雨の影響により、幌糠雨量観測所では、1 時間に 20mm の降雨を観測し、4 箇所の水位観測所のうち、幌糠観測所では、氾濫危険水位を超過し、留萌河口観測所、大和田観測所、峠下観測所では、氾濫注意水位を超過し、水田に一部が冠水した。

留萌ダムでは、約 124m³/s が流入し、約 120m³/s を洪水調節し、下流の水位を低減したほか、留萌市街では、高砂排水機場、東雲排水機場が稼働し、2 機場あわせて約 20 万 m³ の内水排除を実施している。



図 4-1 留萌川流域の出水状況（平成 30 年（2018 年）7 月洪水）

留萌川における主な洪水と被害の状況を以下に示す。

表 4-1 既往の主要洪水の概要

洪水年月日	気象原因	被害状況
昭和 14. 7. 28 ～31	前線に伴う大雨	留萌支庁管内全域に洪水発生
22. 8.15	低気圧による大雨	留萌地方洪水氾濫、行方不明者 1 名、負傷者 1 名、家屋浸水 230 戸同流失 3 戸、橋梁流失 13 ケ所、農地浸水 64ha
26. 9. 2	前線を伴う低気圧	留萌川氾濫、家屋全壊 6 戸、同半壊 31 戸、同浸水 1,181 戸、河川決壊 4 ケ所、橋梁流失 16 ケ所、道路損壊 4 ケ所、農地浸水 1,520ha
28. 7.31	前線に伴う大雨	留萌川氾濫、留萌市家屋全壊 4 戸、同半壊 1 戸、同浸水 1,286 戸、河川決壊 21 ケ所、橋梁流失 24 ケ所、道路損壊 29 ケ所、国鉄留萌線・羽幌線損壊、農地被害 938ha
30. 7. 2	低気圧による豪雨	留萌川氾濫、留萌市家屋浸水 986 戸、橋梁流失 5 ケ所、道路損壊 3 ケ所、国鉄留萌線・羽幌線不通、農地被害 400ha
30. 8.17	前線の停滞による集中豪雨	留萌全域氾濫、家屋全壊 6 戸、同半壊 15 戸、同浸水 3,135 戸、橋梁流失 14 ケ所、道路損壊 33 ケ所、農地被害 1,882ha
36. 7.24	梅雨前線による大雨	留萌川氾濫、留萌市農地被害 182ha
37. 8. 2	台風第 9 号（温帯低気圧）による大雨	留萌川氾濫、農地被害 244ha
38.10. 1	温暖前線による集中豪雨	留萌川氾濫、留萌市家屋浸水 86 戸、農地被害 320ha
39. 8.15	低気圧による集中豪雨	留萌川氾濫、留萌市家屋浸水 185 戸、河川決壊 2 ケ所、道路損壊 2 ケ所、農地被害 172ha
40. 9.16	台風第 24 号による大雨	留萌川氾濫、留萌市家屋浸水 139 戸、河川決壊 2 ケ所、橋梁流失 3 ケ所、道路損壊 2 ケ所、農地被害 250ha
48. 8.17	前線と台風第 10 号くずれの低気圧による集中豪雨	留萌川氾濫、留萌市家屋全壊 1 戸、同浸水 132 戸、河川決壊 2 ケ所、道路損壊 2 ケ所、治山被害 2 ケ所
50. 8.22	台風第 6 号による大雨	留萌川氾濫、留萌市家屋浸水 44 戸、橋梁流失 1 ケ所、道路損壊 1 ケ所、農地被害 219ha
50. 9. 7	低気圧による集中豪雨	留萌川氾濫、留萌市家屋浸水 91 戸、橋梁流失 5 ケ所、道路損壊 1 ケ所、農地被害 355ha
56. 8. 3	前線による大雨	留萌川全域で氾濫、家屋半壊 1 ケ所、同浸水 230 戸（床上 95、床下 125）、橋梁流失 10 ケ所、道路損壊 58 ケ所、国道・国鉄等不通、農地被害 504ha
63. 8.25	前線による集中豪雨	留萌川全域で氾濫、家屋浸水 3,376 戸（床上 1,270、床下 2,106）、橋梁流失 13 ケ所、道路損壊 74 ケ所、土砂くずれ 62 ケ所、国道・JR 等不通、農地被害 623ha
平成 30. 7. 2	前線と台風第 7 号くずれの低気圧	農地被害 64ha

4-2 治水事業の沿革

(1) 治水事業の沿革

留萌川水系の治水事業については、昭和 30 年（1955 年）7 月洪水にかんがみ、同 31 年（1956 年）から 32 年（1957 年）に直轄事業として、留萌市街部の堤防を施工し、さらに昭和 35 年（1960 年）に基準地点大和田における計画高水流量を $660\text{m}^3/\text{s}$ とする留萌川改修総体計画が策定され、これに基づき、峠下から河口までの区間について築堤、掘削等を施工した。

その後、昭和 40 年（1965 年）には新河川法の施行に伴い指定河川となり、昭和 47 年（1972 年）には一級河川の指定を受け、同 49 年（1974 年）に、基準地点大和田における基本高水のピーク流量を $1,000\text{m}^3/\text{s}$ とし、上流ダムにおいて $200\text{m}^3/\text{s}$ を調節し、計画高水流量を $800\text{m}^3/\text{s}$ とする工事実施基本計画を策定した。この計画に基づき、堤防の新設及び護岸等を実施してきた。しかしながら、昭和 56 年（1981 年）8 月及び昭和 63 年（1988 年）8 月と計画規模に迫る、あるいはこれを上回る大出水に遭遇した。特に、昭和 63 年（1988 年）8 月洪水は、その被害の大きさから直轄河川激甚災害対策特別緊急事業に採択され、築堤、掘削、耐越水堤防等を整備するとともに、平成 5 年（1993 年）に工事実施基本計画を改定し、基準地点大和田の基本高水のピーク流量を $1,300\text{m}^3/\text{s}$ とし、洪水調節施設により $500\text{m}^3/\text{s}$ の調節を行い、計画高水流量を $800\text{m}^3/\text{s}$ とする計画とした。

その後、平成 9 年（1997 年）の河川法改正に伴い、留萌川水系河川整備基本方針を平成 11 年（1999 年）12 月に策定した。その基本高水のピーク流量、計画高水流量については、既往洪水等から妥当性を検証の上、工事実施基本計画を踏襲し、基準地点大和田において基本高水のピーク流量を $1,300\text{m}^3/\text{s}$ とし、洪水調節施設により $500\text{m}^3/\text{s}$ の調節を行い、計画高水流量を $800\text{m}^3/\text{s}$ とした。

平成 13 年（2001 年）10 月には、留萌川水系河川整備計画【直轄管理区間】を策定（平成 18 年（2006 年）3 月部分改定）し、河川整備計画の目標流量を基準地点大和田で $1,050\text{m}^3/\text{s}$ とした。この計画に基づき、河道掘削・堤防整備を実施するとともに、洪水調節施設の整備を進めることとした。平成 22 年（2010 年）3 月には留萌ダム・大和田遊水地が完成した。

平成 27 年（2015 年）9 月関東・東北豪雨を受けて、平成 27 年（2015 年）12 月に策定された「水防災意識社会再構築ビジョン」に基づき、平成 28 年（2016 年）3 月に「留萌川減災対策部会」を設置した。その後、同年 8 月に北海道と東北を相次いで台風が襲い、各地で甚大な被害をもたらしたことから、「大規模氾濫減災協議会制度」を新たに盛り込んだ改正水防法が平成 29 年（2017 年）6 月に施行された。これに伴い、本部会を水防法第 15 条の 9 に基づく法定協議会に改組し、名称も「留萌川減災対策協議会」に変更し、「水防災意識社会」の再構築を目的に国、道、町村等が連携・協力して、減災のための目標を共有し、ハード対策とソフト対策を一体的・計画的に推進している。

留萌川は山地に挟まれた地形を流下するため、洪水時は流域の水位上昇が非常に早く、早期に避難困難な水深に達する恐れがある。このため、関係機関で連携して、迅速、確実な避難行動、社会経済被害の最小化を図るために流域タイムラインを作成する。

また、河川管理者、ダム管理者及び関係利水者により、令和2年（2020年）5月に留萌川水系治水協定が締結され、流域内にある既存ダムの有効貯水容量を洪水調節に最大限活用し、下流域の浸水被害の軽減を図る取組を進めている。

さらに、気候変動の影響による水害の頻発化・激甚化を踏まえ治水対策を抜本的に強化するため、留萌川流域治水協議会を設置し、令和3年（2021年）3月に「留萌川流域治水プロジェクト」を策定・公表し、河川整備に加え、あらゆる関係者が協働し、浸水リスクが高いエリアにおける土地利用・住まい方の工夫、水田等の貯留機能有効活用にむけた調整等、水害リスク情報の提供及び迅速かつ確かな避難と被害最小化を図る取組等を組み合わせ、浸水被害の軽減を図る治水対策を推進している。

加えて、流域治水の取組を更に加速化・深化させるため、令和6年（2024年）3月に気候変動の影響を考慮した河川及び流域での対策方針を反映した「留萌川流域治水プロジェクト 2.0」への更新を行った。このプロジェクトにおける地域の主な取組として、留萌市における避難場所及び避難路の確保（高台化）などが検討されている。また、被害軽減のためのハザードマップ、マイ・タイムラインの作成による水害リスクの周知等の取組により、流域における浸水被害の軽減を図ることとしている。

砂防事業については、平成26年（2014年）から平成29年（2017年）にかけて北海道が砂防堰堤の整備を実施しており、土砂災害の防止や土砂流出抑制等に重要な役割を果たしている。

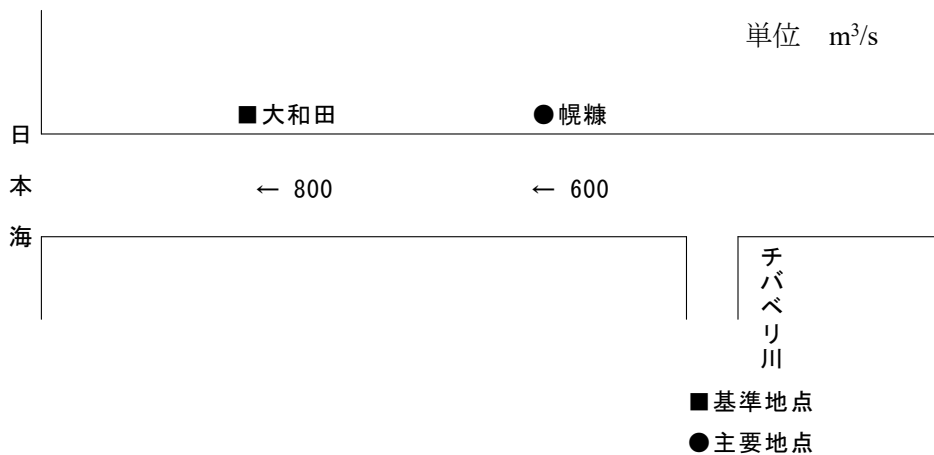


図 4-2 留萌川水系河川整備基本方針における計画高水流量配分図

5. 水利用の現状

5-1 水利用の現状

留萌川水系における利水の現況は、許可水利権として 103 件あり、河川水の利用については、明治 18 年（1885 年）頃からの開拓農民による農業用水としての利用に始まり、現在は約 600ha に及ぶ農地のかんがい利用されている。最大取水量の合計は 1.6293m³/s である。

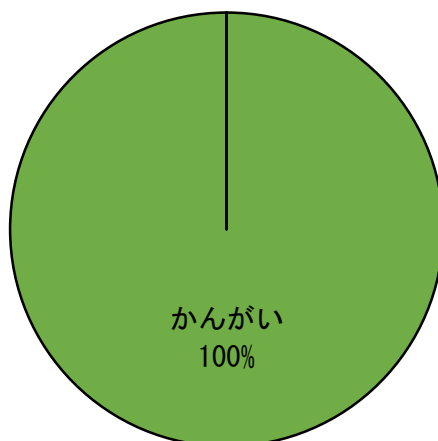


図 5-1 留萌川水系の目的別水利用割合図

表 5-1 留萌川水系水利用現況（法定河川内の許可水利）

目的	件数	最大取水量 (m ³ /s)
かんがい	103	1. 6293
水道用水	0	0
工業用水	0	0
発電用水	0	0
その他	0	0
合計	103	1. 6293

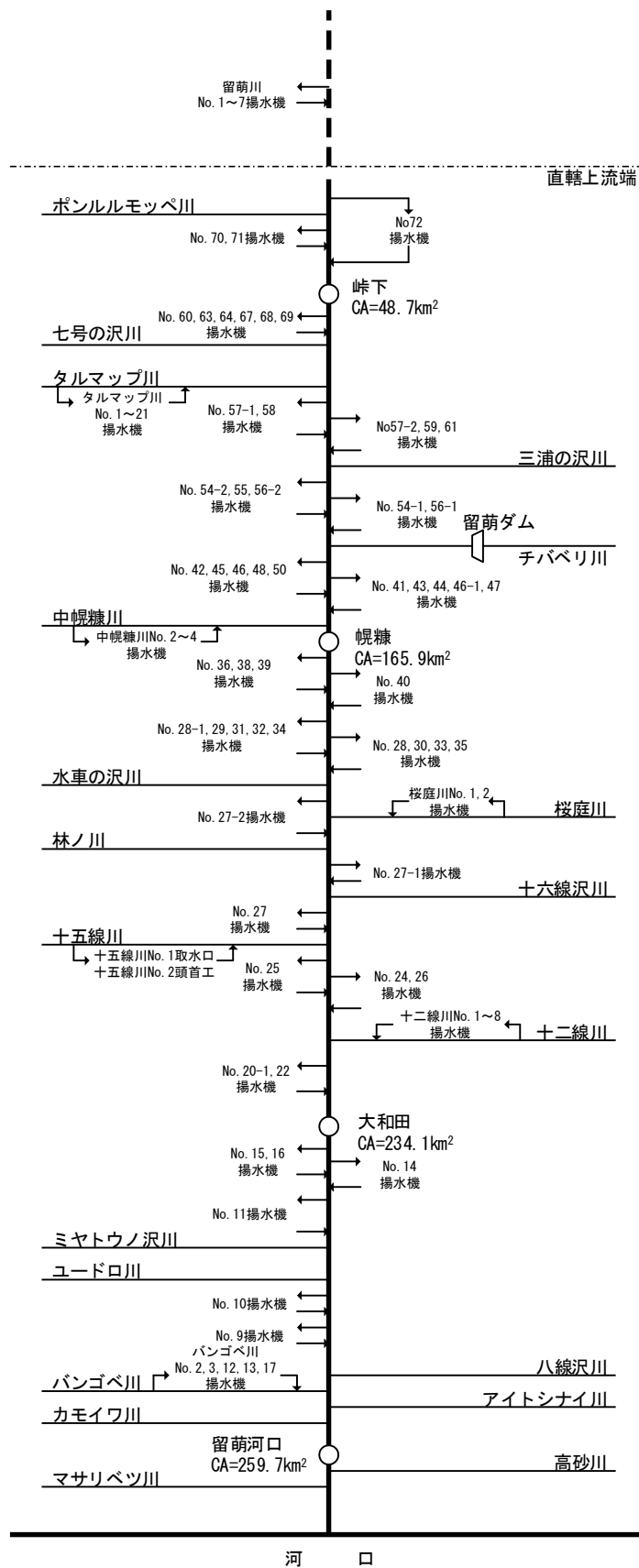


図 5-2 留萌川水利用模式図

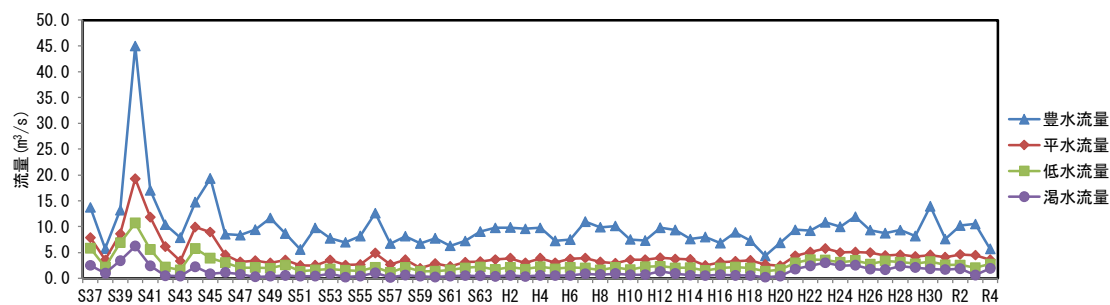
5-2 渇水被害及び渇水調整

留萌川水系において、平成 19 年（2007 年）、平成 29 年（2017 年）、令和元年（2019 年）に渇水が懸念された。このうち平成 19 年（2007 年）については、渇水により農業用水の取水が困難になったことから、防災ダムである樽真布ダムからの放流による対応が行われている。

6. 河川流況及び水質の現状

6-1 河川流況の現状

大和田地点における流況は表 6-1 のとおり、昭和 37 年（1962 年）～令和 4 年（2022 年）までの過去 61 年間の平均で、低水流量約 $2.6\text{m}^3/\text{s}$ 、渇水流量約 $1.1\text{m}^3/\text{s}$ となっており、概ね 10 年に 1 回程度の渇水流量は約 $0.6\text{m}^3/\text{s}$ である。



※出典：国土交通省 水文水質データベース

図 6-1 大和田地点流況経年変化図

表 6-1 大和田地点における流況表

単位：m³/s

年	データ数	欠測数	最大	豊水	平水	低水	渇水	最小	平均
S37	365	—	244.57	13.71	7.86	5.82	2.50	1.11	17.14
S38	365	—	118.68	5.72	3.56	2.18	0.97	0.45	6.66
S39	366	—	189.56	13.19	8.62	6.88	3.40	2.76	13.94
S40	365	—	225.97	44.99	19.26	10.69	6.22	5.13	31.03
S41	365	—	247.46	17.05	11.84	5.56	2.42	2.08	19.95
S42	365	—	199.38	10.38	6.11	2.18	0.48	0.14	12.46
S43	366	—	52.23	7.85	3.35	1.60	0.44	0.02	7.19
S44	365	—	100.96	14.76	9.91	5.77	2.24	0.79	15.13
S45	365	—	142.46	19.34	8.94	3.89	0.84	0.39	17.85
S46	365	—	91.18	8.52	4.54	3.04	1.12	0.66	9.67
S47	366	—	88.42	8.34	3.18	2.08	0.77	0.34	7.99
S48	365	—	124.56	9.44	3.41	2.08	0.27	0.15	11.54
S49	365	—	188.42	11.66	2.97	1.94	0.38	0.17	13.72
S50	365	—	247.12	8.66	3.53	2.58	0.53	0.27	15.29
S51	366	—	119.32	5.58	2.50	1.33	0.38	0.28	8.41
S52	365	—	140.46	9.77	2.52	1.59	0.42	0.26	11.35
S53	365	—	100.23	7.72	3.52	1.81	0.87	0.48	10.35
S54	365	—	109.80	6.95	2.57	1.53	0.23	0.03	8.80
S55	366	—	92.48	8.18	2.69	1.43	0.43	0.30	9.82
S56	365	—	346.59	12.63	4.86	2.13	1.04	0.53	16.18
S57	365	—	144.38	6.70	2.67	1.13	0.15	0.06	12.30
S58	365	—	111.36	8.13	3.58	2.14	0.62	0.24	9.69
S59	364	2	74.38	6.76	1.94	1.34	0.39	0.01	8.22
S60	365	—	82.61	7.72	2.85	1.36	0.24	0.11	8.75
S61	365	—	117.42	6.27	2.28	1.62	0.40	0.20	11.69
S62	365	—	138.01	7.24	3.13	2.03	0.50	0.30	10.11
S63	366	—	381.93	9.05	3.22	2.20	0.46	0.12	12.94
H 1	365	—	100.49	9.77	3.63	1.67	0.37	0.13	9.49
H 2	365	—	94.80	9.82	3.87	2.14	0.53	0.22	9.68
H 3	365	—	118.57	9.57	3.00	1.76	0.34	0.25	9.63
H 4	366	—	87.73	9.77	3.88	2.24	0.55	0.37	10.21
H 5	365	—	78.03	7.26	3.01	1.84	0.50	0.35	8.37
H 6	365	—	114.59	7.48	3.75	2.10	0.52	0.33	11.16
H 7	365	—	81.62	10.95	3.91	1.98	0.88	0.57	10.49
H 8	366	—	102.15	9.85	3.16	1.60	0.71	0.36	10.15
H 9	365	—	100.10	10.12	2.92	2.12	0.91	0.75	10.70
H10	365	—	85.66	7.50	3.56	1.66	0.66	0.28	9.48
H11	365	—	148.71	7.30	3.62	2.25	0.69	0.32	12.10
H12	366	—	131.14	9.78	3.96	2.31	1.32	0.69	13.30
H13	365	—	188.02	9.35	3.74	2.03	0.90	0.55	12.57
H14	365	—	123.72	7.59	3.65	2.05	0.59	0.16	10.13
H15	365	—	113.51	8.00	2.49	1.48	0.50	0.26	10.57
H16	366	—	112.73	6.83	3.11	1.97	0.69	0.50	7.80
H17	365	—	118.87	8.87	3.29	2.15	0.55	0.34	11.62
H18	365	—	132.54	7.30	3.47	1.96	0.51	0.37	10.42
H19	365	—	90.02	4.33	2.67	1.36	0.20	0.15	7.06
H20	366	—	54.90	6.86	2.42	1.65	0.43	0.24	7.00
H21	365	—	70.55	9.40	4.35	2.95	1.76	0.87	9.45
H22	365	—	129.91	9.21	5.06	3.63	2.41	2.22	12.32
H23	365	—	135.44	10.85	5.77	3.53	3.01	3.01	12.80
H24	366	—	186.67	9.97	4.99	3.08	2.44	1.89	12.91
H25	365	—	142.70	11.93	5.08	3.44	2.53	2.37	15.18
H26	365	—	152.94	9.30	4.98	2.76	1.77	1.52	10.99
H27	365	—	68.24	8.72	4.41	3.36	1.63	1.00	9.84
H28	366	—	76.72	9.32	4.55	3.12	2.34	2.18	10.91
H29	365	—	87.32	8.17	4.22	2.82	2.07	0.75	8.37
H30	365	—	237.47	13.94	4.49	3.24	1.81	1.65	14.86
R 1	364	1	96.91	7.60	4.09	2.60	1.69	1.49	8.59
R 2	366	—	62.40	10.23	4.61	2.57	1.85	1.64	8.76
R 3	365	—	88.61	10.49	4.48	2.04	0.61	0.54	10.77
R 4	365	—	83.38	5.67	3.60	2.76	1.92	1.74	9.67
最大値			381.93	44.99	19.26	10.69	6.22	5.13	31.03
平均値			131.43	9.83	4.38	2.59	1.13	0.78	11.40
最小値			52.23	4.33	1.94	1.13	0.15	0.01	6.66
近年61年間(S37～R 4)第6位			74.38	6.70	2.52	1.43	0.34	0.12	7.99
近年60年間(S38～R 4)第6位			74.38	6.70	2.52	1.43	0.34	0.12	7.99
近年50年間(S48～R 4)第5位			74.38	6.70	2.50	1.36	0.27	0.12	8.37
近年40年間(S58～R 4)第4位			70.55	6.76	2.49	1.48	0.37	0.13	8.22
近年30年間(H 5～R 4)第3位			68.24	6.83	2.67	1.60	0.50	0.24	7.80
近年20年間(H15～R 4)第2位			62.40	5.67	2.49	1.48	0.43	0.24	7.06
近年10年間(H25～R 4)第1位			62.40	5.67	3.60	2.04	0.61	0.54	8.37

注) 流域面積：253.3km²

※出典：国土交通省 水文水質データベース

6-2 河川水質の現状

留萌川水系では、表 6-2 及び図 6-2 に示すように水質環境基準が指定されており、留萌川上流は AA 類型、留萌川中流は A 類型、留萌川下流は B 類型に指定されている。

留萌川水系の水質は、図 6-3 に示すように、上流、下流部において過去に環境基準を上回る年もあったが、近年は水質環境基準値以下を満たしており、良好な水質を維持している。

表 6-2 環境基準の類型指定状況（昭和 47 年 4 月 1 日北海道告示）

水 域 名	該当 類型	達成 期間	基準地点名	備 考
留萌川下流 （十五線川合流点から下流）	B	イ	留萌橋（河口）	S47.4.1指定 道告示第1093号
留萌川中流 （タルマップ川合流点から十五線川 合流点まで（十五線川を含む。））	A	イ	16線橋	
留萌川上流 （タルマップ川合流点から上流（タル マップ川を含む。））	AA	イ	橘橋（峠下）	

注）『達成期間』の「イ」については、類型指定後、直ちに達成することを示す。

注）『達成期間』の「ロ」については、類型指定後、5 年以内に可及的速やかに達成することを意味する。

< 凡 例 >

- : 水域類型の区分点
- : 水域類型の区分点で環境基準点
- : 環境基準点
- : 補助点
- △ : その他地点
- : 地点名（環境基準点）
- 白抜き : 地点名（補助点、その他地点）

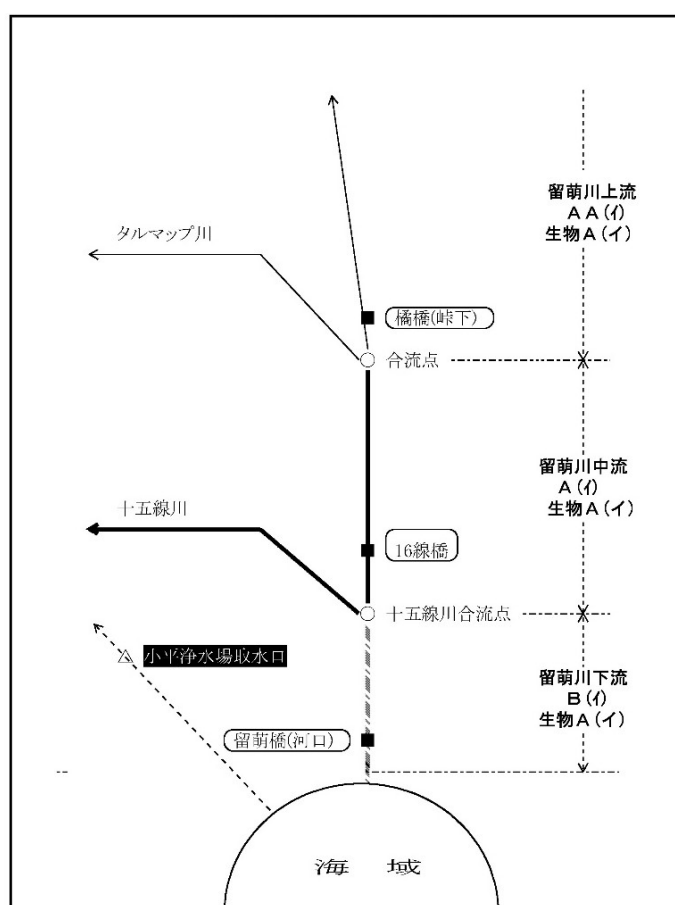


図 6-2 留萌川水系水質環境基準地点および類型指定区間

※出典：北海道 河川類型指定状況模式図 令和 5 年 12 月現在

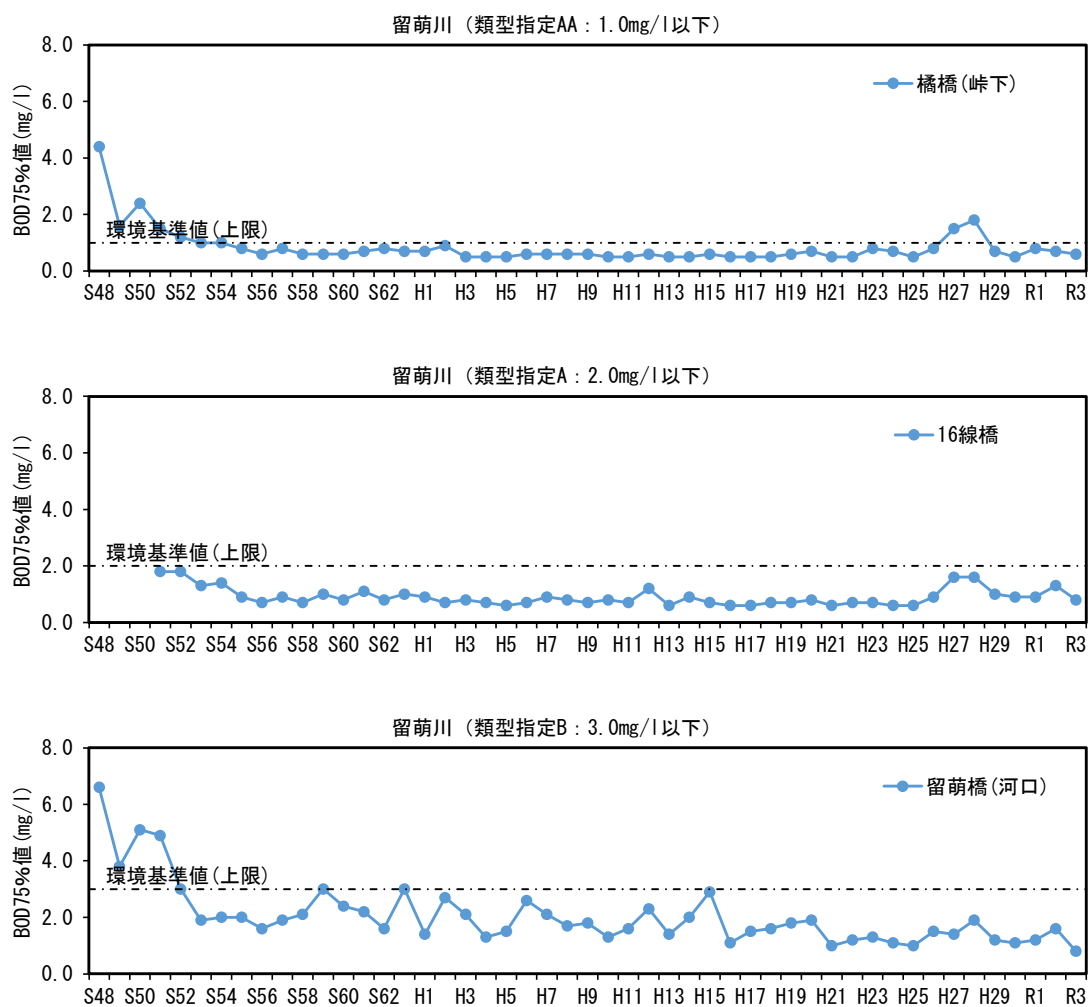


図 6-3 留萌川における水質(BOD75%値)の経年変化

※出典：北海道 公共用水域の水質測定結果

7. 河川空間の利用状況

7-1 河川敷等の利用の状況

(1) 河川敷地の利用状況

留萌川の年間河川空間利用者総数（推定）を以下に示す。

令和元年度（2019年度）の利用者数の推計は約1万6千人で、平成26年度（2014年度）調査から約4.1千人減少している。利用形態別では、散策等が98.9%で最も多く、次いで水遊び1.0%、釣り0.2%となり、スポーツは0%の割合であった。利用場所別では、堤防が97.3%と最も多く、次いで高水敷1.6%、水際は1.1%の割合であった。

留萌川は、他の河川と比べると、高水敷が狭隘で、利用可能な面積は非常に少ない状況にあるものの、下流市街地周辺を中心に、階段護岸や堤防上のサイクリングロード、小公園が整備されている箇所もあり、散策やジョギング、まつりやイベントを行う場として有効に利用されている。

表 7-1 留萌川の年間空間利用状況

区分	項目	年間推計値(人)			利用状況の割合		
		平成21年度	平成26年度	令和元年度	平成21年度	平成26年度	令和元年度
形態別	スポーツ	140	1,073	0	スポーツ 0.7%	スポーツ 1.9%	釣り 0.2%
	釣り	0	132	28		釣り 0.2%	釣り 0.2%
	水遊び	188	0	160	水遊び 1.0%		水遊び 1.0%
	散策等	18,560	56,064	16,538	散策等 98.3%	散策等 97.9%	散策等 98.9%
	合計	18,888	57,269	16,726			
場所別	水面	1	0	0	水面 0.0%		
	水際	188	132	188	水際 1.0%	水際 0.2%	水際 1.1%
	高水敷	430	9,958	271	高水敷 2.3%	高水敷 17.4%	高水敷 1.6%
	堤防	18,270	47,179	16,268	堤防 96.7%	堤防 82.4%	堤防 97.3%
	合計	18,889	57,269	16,727			

※河川水辺の国勢調査（河川空間利用実態調査）による。

※平成26年度、令和元年度調査結果ではイベント調査結果は含まれていない。

(2) 高水敷の利用状況

留萌川は、他の河川と比べると、高水敷が狭隘で、利用可能な面積は非常に少ない状況であるが、地域のニーズに適応した利用がなされている。

高水敷は、洪水時以外は未使用であるよりも洪水流通時管理面で支障の生ずることが無く、かつ河川の公共用物としての性格にあった利用がなされる場合は、河川にとって好ましいものである。市街地周辺においては、下流部の高砂公園、中流部の留萌川河畔緑地公園等、河川敷地の緑地化・公園化を推進し、開放・利用を図っている。

留萌川での河川敷地としての利用状況は表 7-2 のとおりである。

表 7-2 河川敷地の占有状況（直轄管理区間）

単位：ha、下段（ ）：％

河川名	河川公園		水田耕作		畑耕作		採草地		その他		合計	
	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積
留萌川	8	1.8 (7)	2	1.0 (4)	1	0.3 (1)	1	0.2 (1)	188	21.4 (87)	200	24.7 (100)

注）令和6年8月7日調製

※出典：北海道開発局資料



高砂公園裏の河川敷



留萌川河畔緑地公園

写真 7-1 高水敷の利用状況

7-2 河川の利用状況

河川の利用については、うるおいとやすらぎを得られるオープンスペースとして、市街地付近に公園や運動場等が整備され、スポーツ、散策等多目的に利用されている。

(1) ダム部

留萌ダム周辺では、森林での観察会や、木の種などを採り、自然の大切さを学ぶ自然観察会が行われている。

ダム湖のチバベリ湖では、冬季は冬の留萌ダムを楽しんでもらうため、2月頃に「ダムを灯す雪灯り」が開催されており、前日にスノーキャンドルを作り、次の日に点灯させて、幻想的な留萌ダムを演出している。夏季は、7月上旬～10月末までの期間にカヌー乗り場への進入道路を一般開放し、ダム湖の利活用を推進している。



自然観察会



ダムを灯す雪灯り



カヌー試乗会

※写真出典：留萌開発建設部 HP より

写真 7-2 留萌ダム周辺の利用状況

(2) 上流部

上流部では、河川生物環境の教育の場として、地元小学校（潮静小学校）と河川協力団体であるルルモッペ河川愛護の会と協働で、峠下水位観測所付近で毎年サクラマス稚魚の放流を実施している。



サクラマス稚魚放流

※写真出典：留萌開発建設部 河川管理レポート 2022 留萌川より

写真 7-3 留萌川上流部の利用状況

(3) 中流部

中流部の幌糠においては「幌糠水辺の楽校」が整備され、河川愛護、水質保全の関心を高めてもらう事を目的として、流域の小学校の児童が参加する川の自然観察会が行われている。観察会では、魚類、水生生物、陸上昆虫の採取及び観察、河川水質の簡易調査を実施している。



川の自然観察会

※写真出典：留萌開発建設部 河川管理レポート 2022 留萌川より

写真 7-4 留萌川中流部の利用状況

(4) 下流部

下流部は、毎年 8 月に留萌川まつりが開催され、昭和 63 年（1988 年）の水害の記憶を忘れないために、水防災体験や屋台等の催し物を実施するイベントが開催されている。特に、水防災体験における E ボート漕ぎの体験やリバーレスキュー訓練などで河川利用されている。



留萌川まつり開催状況

※写真出典：かわたびほっかいどうホームページより

写真 7-5 留萌川下流部の利用状況

7-3 内水面漁業

留萌川流域では、内水面漁業権は設定されていない。

8. 河道特性

8-1 河道の特性

留萌川は、留萌市の中央部を流れる、流域面積 270km²、幹川流路延長 44km の一級河川である。流域は、三角形に近い形状をなし、大部分が山地で占められ、狭い平地部を蛇行しながら流れており、河床は上流部が急勾配で下流に行くにしたがって緩くなっていて河口から 5km くらいまでが感潮域である。河川敷は、全般的に狭く高水敷はほとんどない。

(1) 上流部 (20.0k~25.2k)

上流部も山沿いを流れている部分が多く河道内に樹木が茂っており、高水敷はない。

河床勾配は 1/1,100~1/450 と急勾配になっており、河床材料は砂礫で礫の量が 7~8 割を占めている。



※写真出典：北海道開発局

写真 8-1 上流域

(2) 中流部 (3.0k~20.0k)

中流部は、山沿いを流れている部分が多く蛇行が目立つ。河道内に樹木が茂っている。河川敷幅は狭く、高水敷はほとんどない。

河床勾配は 1/2,500~1/1,100 となっており、河床材料は砂礫で上流に行くにしたがって礫の量が増える傾向にあるが、明瞭な瀬や淵は見られない。



※写真出典：北海道開発局

写真 8-2 中流部

(3) 下流部 (0.0k~3.0k)

下流部は、激特事業によりほぼ改修が完了しており、河道内に樹木は見られない。河川敷幅は狭く高水敷もほとんど見られない。

河床勾配は $1/5,000 \sim 1/2,500$ と緩く感潮区間となっている。河床材料は 2.0k までは、シルト及び細砂が多く、上流に行くにしたがって砂及び礫が増えてくる。



※写真出典：北海道開発局

写真 8-3 下流部

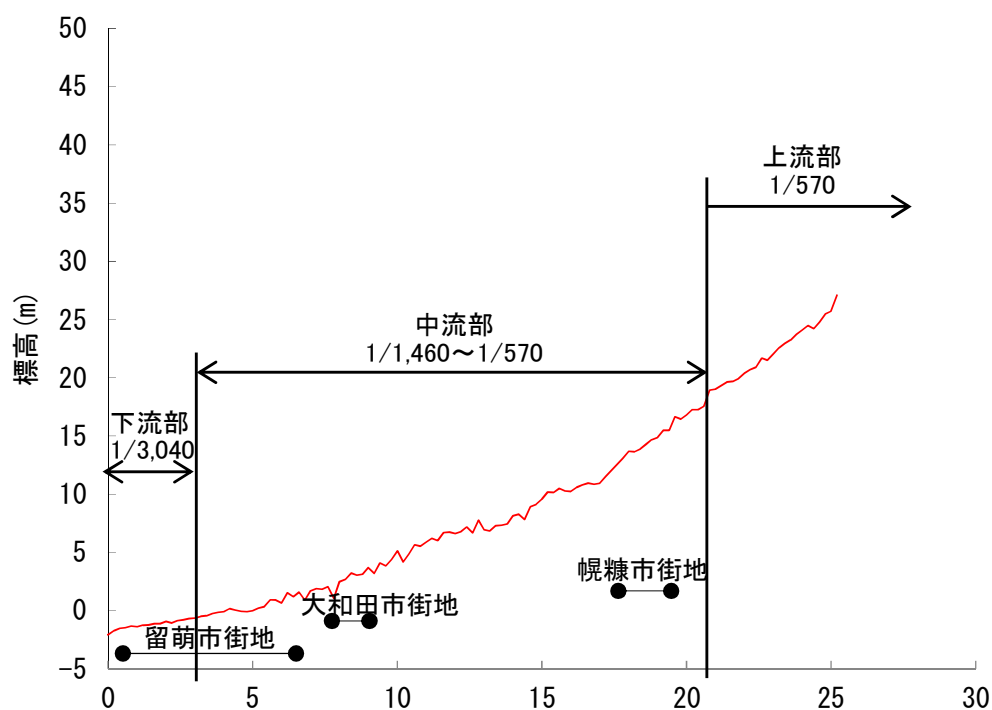


図 8-1 留萌川河床高縦断面図

8-2 河床変動の経年の変化

昭和 63 年（1988 年）から平成 7 年（1995 年）にかけて激甚災害特別緊急事業の河道掘削の影響により河床が低下している。その後は、局所的に土砂堆積や河床低下がみられるものの、全体的には安定傾向である。

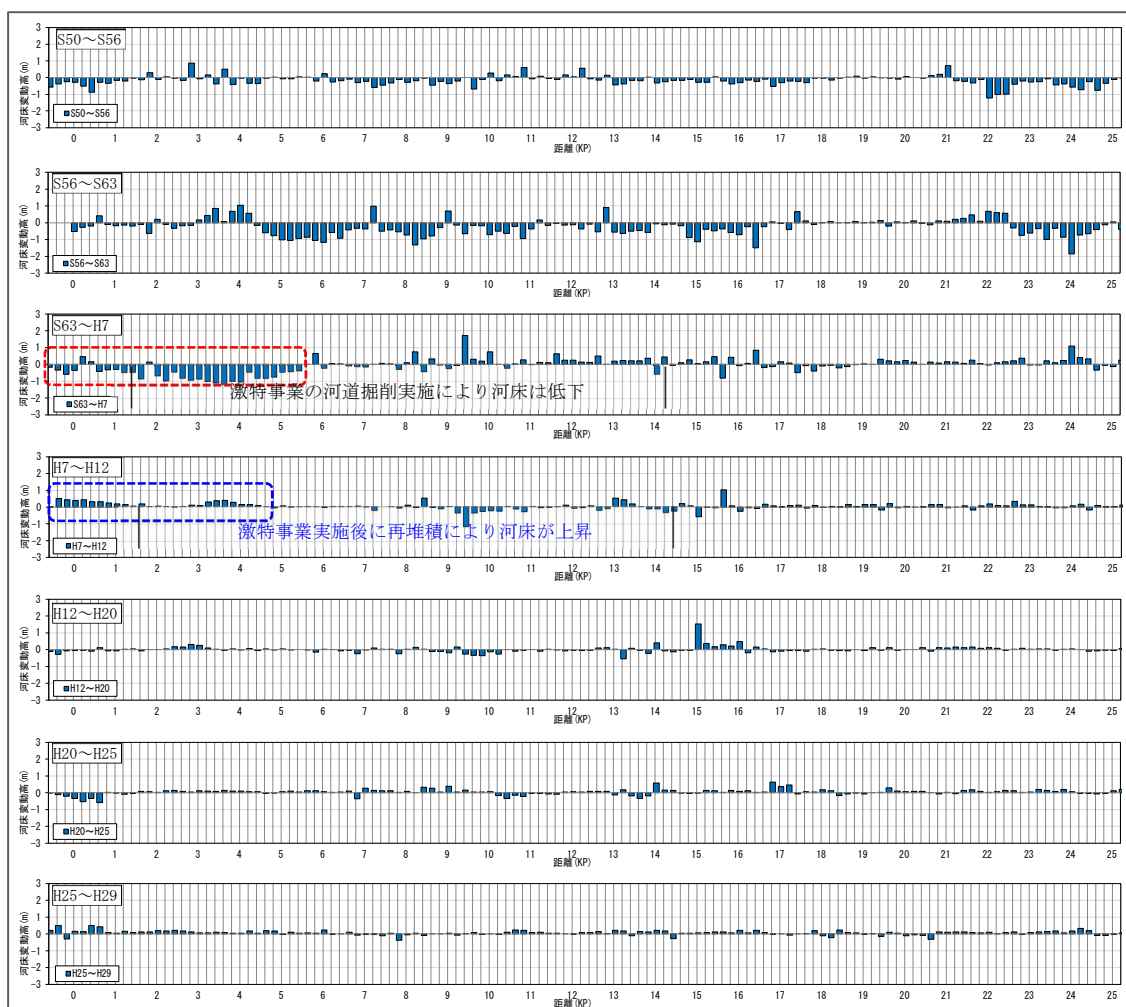


図 8-2 平均河床高の変化

9. 河川管理

9-1 河川管理区間

留萌川は、幹川流路延長 44km の一級河川であり、以下の区間を国が管理している。

表 9-1 留萌川水系の直轄管理区間

区 分	河川名	区 間		
		上流端（目標物）	下 流 端	延長 (km)
指定区間外 区間	留 萌 川	留萌市大字留萌村峠下 2006 番地先	海	31.3
	チバベリ川	・左 岸 留萌市大字留萌村字チバベリ 国有林留萌事業区 100 林班り小班地先 ・右 岸 留萌市大字留萌村字チバベリ 国有林留萌事業区 103 林班り小班地先	留萌川への合流点	7.9
	チバベリ左川	・左 岸 留萌市大字留萌村字幌糠 2934 番地先 ・右 岸 留萌市大字留萌村字幌糠 国有林留萌事業区 109 林班お小班地先	チバベリ川への合流点	1.5
	チバベリ右川	・左 岸 留萌市大字留萌村字チバベリ 2723 番地先 ・右 岸 留萌市大字留萌村字チバベリ 3609 番地先	チバベリ川への合流点	3.4
	チバベリ右奥の沢川	留萌市大字留萌村字チバベリ 2813 番地先の上流端を示す標柱	チバベリ右川への合流点	0.3

9-2 河川管理施設

留萌川における河川管理施設等の整備状況は下記のとおりである。

(1) 堤防

堤防整備の現状（令和5年（2023年）3月末時点）は下記のとおりである。

表 9-2 堤防整備の現状

	延長（km）
完成堤防	17.1（69.2%）
暫定堤防	5.4（21.9%）
未施工区間	2.2（8.9%）
計	24.7

※延長は直轄管理区間の左右岸の計である。

(2) 洪水調節施設

完成施設 ： 留萌ダム （治水容量：11,000 千 m³）
 大和田遊水地（治水容量： 500 千 m³）
事業中施設 ： なし

(3) 排水機場等

排水機場 ： 高砂排水機場（4 m³/s）
 東雲排水機場（4 m³/s）

※大臣管理区間の施設のみ記載。

9-3 水防体制

(1) 河川情報の概要

留萌川では、流域内に雨量観測所（7箇所）・水位観測所（4箇所）を設置し、無線等により迅速に情報収集を行うとともに、これらのデータを用いて河川の水位予測等を行い水防活動に活用している。また、近年では光ケーブル網により接続された遠隔監視カメラを用いた管理も行い、迅速な水防活動の一助となっている。

(2) 水防警報の概要

留萌川では、洪水による災害が起こる恐れがある場合に、基準となる水位観測所の水位をもとに市町村を含む水防関係機関に対し、河川の巡視や災害発生防止のための水防活動を迅速かつ的確に行えるように水防警報を発令している。

(3) 洪水予報

留萌川では、水防法及び気象業務法に基づき、「洪水予報」を気象台と共同で発表している。流域の雨量や水位の状況、水位予測等を一般住民にわかりやすく迅速に伝えるべく川の防災情報、水害リスクライン等の整備を進めている。



※国土数値情報（河川・海岸線・行政区域）（国土交通省）を加工して作成

図 9-1 洪水予報河川等及び雨量・水位観測所

9-4 危機管理への取り組み

(1) 水防連絡協議会との連携

留萌川において、洪水・高潮等による災害の発生を防止又は被害を軽減するため、国及び地方自治体の関係機関が連携し、住民の避難、水防活動等を迅速かつ円滑に行うために水防連絡協議会が結成されている。この協議会により、重要水防箇所の合同巡視、水防団・水防資材の整備状況の把握、定期的な水防訓練等を推進している。



写真 9-1 天塩川下流・留萌川水防連絡協議会



写真 9-2 留萌川水防技術講習会の状況

※写真出典：北海道開発局

(2) 水質事故対策の実施

油類や有害物質が河川に流出する水質事故は、流域内に生息する魚類や生態系のみならず、水利用者にも多大な被害を与える。水質事故が発生した場合、その被害を最小限に抑えるため、迅速で適切な対応が必要になっている。このため、北海道一級河川環境保全連絡協議会留萌川部会により、連絡体制を強化するとともに、水質事故訓練等を行い迅速な対応を行うことが大切であり、また、水質事故に備え、常時から資機材の備蓄を行っている。



写真 9-3 水質事故に対する取り組み
(令和4年度(2022年度)水質事故訓練より)

※写真出典：令和4年度 留萌河川管理レポート

(3) 洪水危機管理の取り組み

洪水危機管理において、平常時から危機管理に対する意識の形成を図るとともに、洪水発生時の被害を最小限に抑えるため、浸水想定区域図を公表するとともに、水防計画・避難計画の策定の支援、土地利用計画との調整を関係機関や地域住民等と連携して推進している。

(4) 地震・津波対策への取り組み

留萌開発建設部管内では、過去 100 年において、震度 4 を超える地震を観測したものが 11 回発生している。過去 30 年では、震度 4 を超える地震が 8 回発生し、平成 16 年（2004 年）の留萌支庁南部の地震では、最大震度 5 強を観測しており、地域に被害を及ぼす可能性が高いと考えられており、津波の被害も想定されている。

表 9-3 留萌川流域に影響を与えた主な地震

発生 年月日	地震名	震度	M (マグニチュード)	主な被害
昭和 15 年 (1940 年) 8 月 2 日	積丹半島沖 地震	4	7.5	津波 3m（苫前町） 2m（天塩町・羽幌町・留萌市・増毛町） 死者 10 名 負傷者 24 名 家屋全壊（流出）26 棟 半壊 7 棟
昭和 22 年 (1947 年) 11 月 4 日	留萌すぐ沖 地震	4	6.7	津波 70cm（羽幌町） 漁船などにも被害
平成 5 年 (1993 年) 8 月 3 日	—	4	3.2	不明
平成 7 年 (1995 年) 5 月 23 日	—	5	5.9	不明
平成 16 年 (2004 年) 12 月 14 日	留萌支庁南部 の地震	5 強	6.1	負傷者 8 名 家屋一部破損 165 棟
平成 17 年 (2005 年) 3 月 18 日	—	4	5.0	不明
平成 28 年 (2016 年) 11 月 25 日	—	4	4.6	不明
平成 30 年 (2018 年) 9 月 6 日	—	4	6.7	不明
令和 4 年 (2022 年) 6 月 20 日	—	4	4.4	不明
令和 4 年 (2022 年) 8 月 11 日	—	4	5.4	不明
令和 6 年 (2024 年) 9 月 24 日	—	4	3.7	不明

注1) 出典：留萌開発建設部 HP、気象庁 震度データベースより

河川津波対策にあたっては、発生頻度は極めて低いものの、発生すれば甚大な被害をもたらす「最大クラスの津波」は施設対応を超過する事象として、住民等の生命を守ることを最優先とし、流域の関係者が津波防災地域づくり等と一体となって減災対策を実施する。また、最大クラスの津波に比べて発生頻度は高く、津波高は低いものの大きな被害をもたらす「計画津波」に対しては、津波による災害から人命や財産等を守るため、海岸における防御と一体となって河川堤防等により津波災害を防御するものとする。

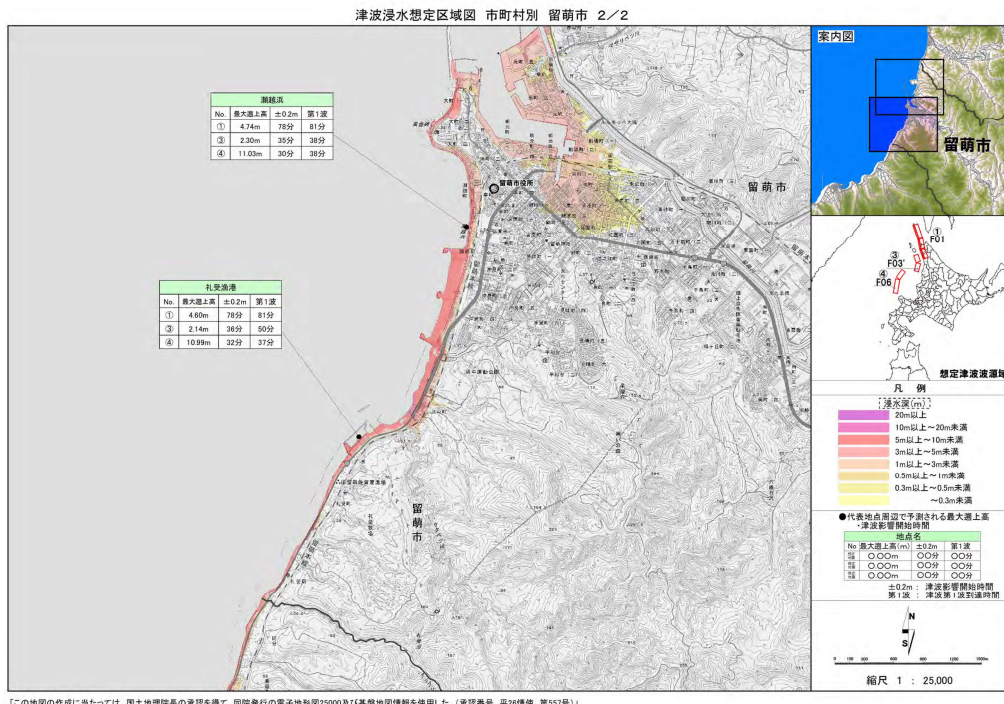
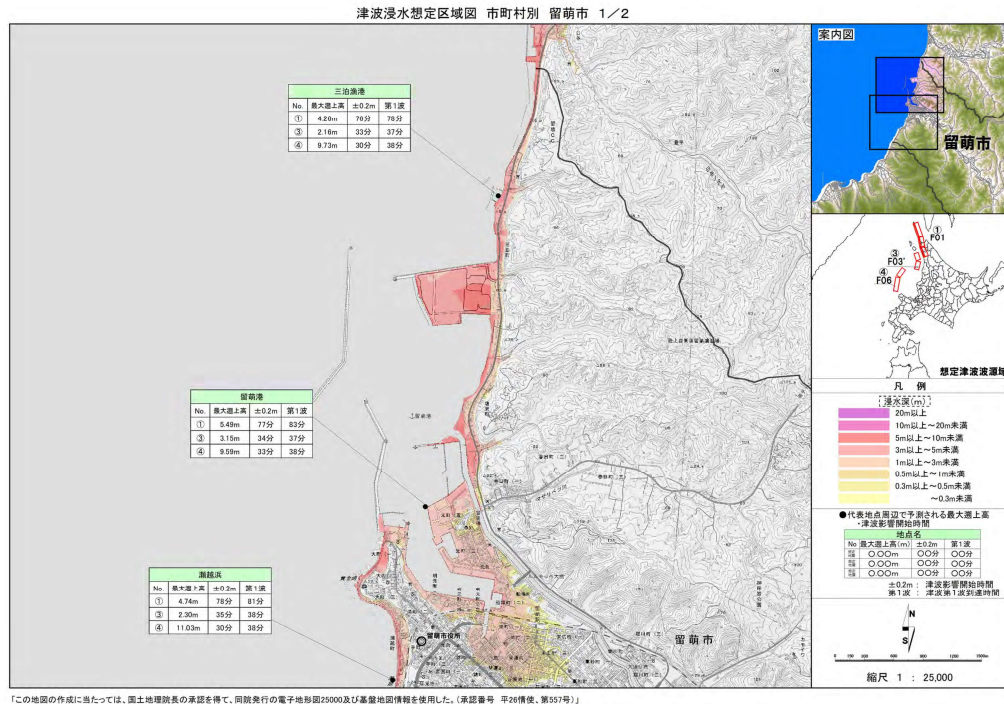


図 9-2 津波浸水想定区域図

10. 地域との連携

河川清掃活動や河川愛護モニター制度等の活用により、住民参加型の河川管理の構築に努める。留萌川では、河川清掃など様々な市民活動が行われており、今後も市民等の川での社会貢献活動を支援するとともに、地域住民・市民団体・関係機関及び河川管理者が、各々の役割を認識し、連携・協働して、流域に伝わる文化等に配慮しつつ効果的かつきめ細かな河川管理を実施する。

10-1 地域住民、河川協力団体、市民団体等との協働

(1) 実施の基本的な考え方

河川環境の保全や河川利用について、地域住民・河川協力団体・市民団体等との協働により、地域の特性を反映した川の維持管理を実施する。

(2) 実施内容

河川清掃等において、地域住民・河川協力団体・市民団体等と協働する。

(3) 実施に当たっての留意点

地域の取り組みと連携し、河川整備や住民参加型の河川管理体系の構築に努める。



写真 10-1 留萌川河川清掃（下流部）

10-2 関係自治体との連携・調整

(1) 実施の基本的な考え方

留萌市等と連携して、効果的・効率的な河川の維持管理を実施する。

(2) 実施内容

【減災対策協議会】

市町村等と連携・協力して、大規模氾濫に対して減災のための目標を共有し、減災対策の取組みを実施する。

【合同巡視】

重要水防箇所や危険箇所等において関係自治体と連携し、出水期前に合同巡視を実施する。また、河川管理施設の安全利用点検を行う。

(3) 実施に当たっての留意点

河川巡視や各種点検の結果、注意すべき箇所については、市町村との情報共有を密に行う。



写真 10-2 重要水防箇所の合同巡視（留萌川）